

新宗教論



人王
跡

印

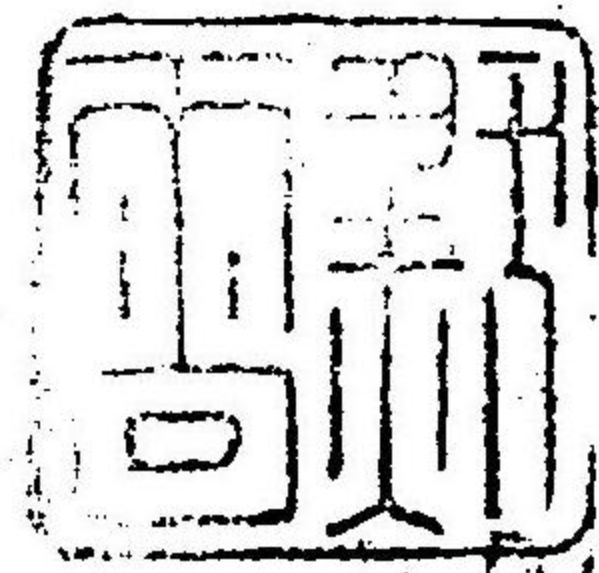
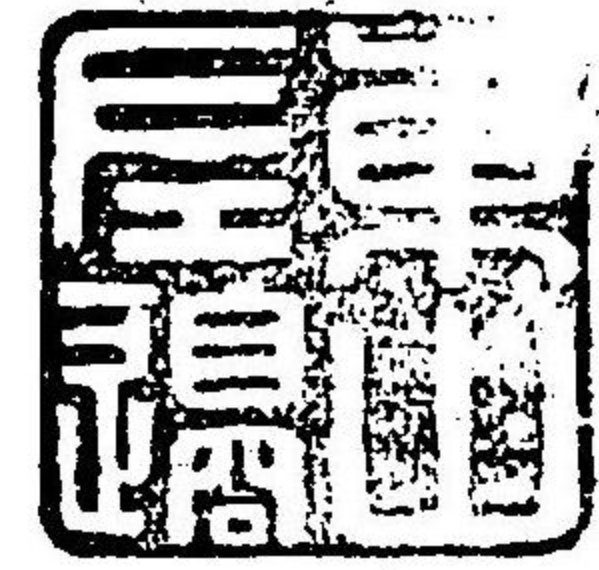
衆生無邊誓願度
煩惱無盡誓願斷
法門無量誓願學
佛道無上誓願成

空
王
跡

01306

來生無邊普願度
煩惱無盡普願斷
法門無量普願學
佛道無上普願成

達仁默齋



序

蕩蕩乎盡宇宙之充塞、恢恢焉極色空之融
混、無相可觀、無迹可尋、非佛非耶非儒非
回、隨機應現、而爲釋迦掌中之金波羅華、
赴感同化、而爲基督背後之十字架、溫潤含
蓄、而爲孔丘之韋編、光芒陸離、而爲馬哈
德之利劍、至遠包空而空不可分、至近溢目
而目不可覩、是果爲何物乎、殊不知、此是
佛陀之大慈、上帝之福音也矣、在天同天、

在地同地、造化依之而轉旋、物象由之而生
植、能成就一切、而一切不能成就者、大慈
也、能蓋覆一切、而一切不能蓋覆者、福音
也、偉哉大慈、大哉福音、然而群生夙迷自
性、妄作情執、於是有同焉、有異焉、謂同則
同乎憎愛、謂異則異其憎愛、所趨之見、千
差萬別、殆不可得而一也、爰有二人焉、一
人執東爲是、則所向皆東、一人執西爲是、則
所向皆西、其執東爲是者、每以西爲非、而

不知執西爲是者、反觀吾之東亦非也、其執
東者、不知西向之人、指吾東爲非、其進東之
步益遠、自以爲益是、彼以謂益非、其執西
者亦然、二人之所執、不翅矛盾之不相入
也、以其不相入、則天下之是非、未有能同
之者、故聖賢間出而救之、垂言立教、必欲
同其是非之心、化其所執之情、奈何教跡
愈彰、而是非愈熾、如今日本宗教者之狀態
亦酷似之、豈可不悲哉、居士大拙深慨不

措、近著一書名曰新宗教論、蓋是雖渠不
過述多年學植之一班、然至其論佛論神論
眞論俗、則着眼公平、用意精確、而與先所
謂同乎憎愛異乎憎愛者、大異其撰、可謂
裨益當世教學者不鮮少矣、乃以贊襄之
意、喜而爲之序

明治二十九年六月

洪嶽 釋 宗 演 識

文學博士元良勇次郎先生の書簡

拜啓陳ば貴著新宗教論拜讀致し候處御高見至極現今の需要に適したるも
のと存候本邦に於ては現今佛敎あり儒敎あり基督敎ありと雖も將來國民
の道德を律すべきものは果して如何なるものに候や古來の歴史に鑑みて
歴史的道德を究め之を將來に應用するを以て足れりとなすべき哉愚考す
るに國民道德の基本たるものは古今に貫通する不變の主義たるべく今更
之を論究するの必要なさか如くに似たりと雖も又退て考ふるに社會の現
象は其文明の進歩と共に日々複雑に進み年々多くの新現象現出するもの
に候然らば舊に習慣的道德に満足すべきにあらず同じく忠孝を實行する
にも其方法を異にすべきに候得者従つて歴史の研覈に加ふるに形而上の
理を論究し現今の國情に照らし以て將來における國民の理想を定むるが

如きは國民の宗教及道德問題として必要の研究と存候然るに佛教或は基督教の如き或は一宗教の見解より此大問題を論じたるもの世上少なからざるも廣く之を論じたるもの甚稀なるは遺憾とする所に御座候貴著は即ち此缺點を補ひ世の思想家の注意を惹き起すこと蓋し少々にあらずと存候聊か愚見を記し以て其發行を祝すること斯くの如に御座候

敬具

九月九日

元良勇次郎

鈴木貞太郎様

凡例

一此書題して新宗教論と云へども今日の所謂新宗教とは異にして別に一旗幟をたてんとするものなり吾人は國家の進化をのみ中心として科學に最上の權威を與ふるものと一致する能はず本書はまた宗教眞義と名づくるも可なるべきか

一此書は陽春三月の末つかたに脱稿したるものなるが其後種々の事情に妨げられ漸く今日に至りて發行するの運びとなりたり其間亦多少の意見進歩したるものあり従つて此書を訂正するの必要あれども如何せん近來太忙生にて意の如くなる能はず因て暫く此まゝにて公にせんと欲す他日もし版を改むる時節あらんには必ず充分の訂正を加ふべし讀者其大體を了せば則ち可ならむ

明治二十九年十一月

京都において

大拙居士識す

新宗教論目次

第一	緒言	一
第二	宗教	一九
第三	神	四三
第四	信仰	六九
第五	儀式禮拜祈禱	七九
第六	教祖	九七
第七	人	一〇九
第八	無我	一二五
第九	不生不滅	一四七
第十	宗教と哲學との關係	一八〇
第十一	宗教と科學との關係	一九二
第十二	宗教と道德との區別	二〇六

第十三 宗教と教育との關係……………二一五

第十四 宗教と社會問題……………二二五

第十五 宗教と國家……………二四九

第十六 宗教と家庭……………二六三

以上……………

新宗教論

鈴木大拙居士著



緒言

此篇は何のためになれるか請ふ先づ吾人をして之を辯せしめよ
 思ふに今日は物質主義快樂主義全盛の時代なるかな彼も幸福説を唱
 へ此も功利説を唱へ到る處に快樂主義は歡迎せられんとす是を以て
 言ふも事宗教に涉り談信仰に及べば其是非曲直を判斷するの際を與へ
 ずして直に之を排斥し古人が金科玉條として尊び傳へたる宗教信仰
 をも一言に罵倒して破草鞋にたも如かずとなす彼等の基督教を攻撃す
 るや曰く「アダム・イヴ」彼何ものぞ一たびエデンの樂園を失ひたるより
 (一) 吾曹は今や類に汗して糧を求めざるを得ずと謂ふか進化の理法は決

して斯かる奇怪の事あるを許さず又基督は一言にて海神の怒れるを鎮め水上を歩行して神を濡らさざりしと謂ふか是豈に吾曹日常の經驗に相應すとせんや」と而して又其佛教を非難するや曰く「佛像を造りて之を堂中に安置し花を捧げ香を焚きて叩頭九拜以て在世の幸福死後の冥福を祈らば必ず感應ありと謂ふかされど若し此の如き儀式に由りて人生悉く意の如くなるを得ば火を流し水を焼く敢て難事となさず安も亦甚しからずや又西方淨土に極樂あり阿彌陀の本願に依頼して自力の念を挾まざれば其光明に攝取せられて死後必ず安樂國に往くを得ると謂ふかされど西方十萬億土とは何れを指せるものなるか阿彌陀とは如何なる人物を指せるものなるか彼の本願は如何にして衆生を救ふの魔力あるを得るか妄斷此の如く迷信此の如きは如何なる論理より推斷し來れるにや科學は決して之れあるを信する能はず」と今日の論者は大抵此の如く深思靜慮を迂なりとなすが上に科學の

眞意を誤解して物質主義快樂主義現在主義を教ふるものとなし由て以て宗教の儀式信仰を盲擊して假す所なからんとす而してかの世間輕佻浮薄の徒滔々として雷同し附和し相率ゐて快樂主義の大渦浪中に沈淪せんとすることを哀れなれ

蓋し過渡の時代變遷の時代は毎に混沌として不定ならずと云ふことなし而して今日の宗教界は即ち是か科學は古來の迷信を打破したり而して未だ之に代ふるの信仰あらず哲學は舊時の宗教を放却したり而して未だ之に代ふるの宗教あらず此時に當りて勢力を得るものは勢の趨く所自ら物質主義快樂主義ならざるを得ず

國家一日も法律なかるべからず人心一日も信仰なかるべからず國家法律なければ生命財産の不安を奈何にせん人心信仰なければ敗徳無慚の横溢を如何にせん物質的文化の進歩は固より喜ぶべしされど之と同時に宗教的信仰の退化を來たさば其得失果して如何蓋し物質主

(四)

緒

言

義は宗教的信仰と全然相反す兩者決して並立する能はず一起ては他
 必す斃れん是を以て我邦の今日の精神界は物質主義の侵入するに従
 ひて嚴肅敬虔の風地を掃ふて去らんとするに至る而して是唯我邦の
 精神界のみならず歐米全土も亦將に此の如きものあらんとするを思
 はい道に志すもの豈に長大息に堪ふべけんや
 彼等は思惟すらく只貴ぶべきは泰西功利の論なるかな人間は幸福を
 獲んとて生れたる也最少の勞力を以て最多の報酬を得れば則ち足れ
 り社會の最大多數に最大幸福を與ふれば人間の能事畢れるなり親に
 孝を盡し君に忠を致すが如き弱を扶け不幸を憐むが如き只自愛の一
 念より涌き出でたる也人生何の嚴肅なる意義あらんやと物質主義は
 即ち快樂主義なり快樂主義は即ち功利主義なり功利主義は即ち自愛
 主義なり自愛主義は即ち非宗教主義也是を以てたゞさへ宗教思想に
 乏しと評せらるゝ邦人は相率ゐて無信仰主義の崇拜者となり了れり

緒

言

(五)

願れば往古我邦佛教の盛大なりし頃は宗教信仰の人心を支配する願
 る強大にして上は王公大人より下は田父野老に至るまで一心に佛陀
 に歸依して餘念なかりし也天子の神聖を以て三寶の奴と稱し給ひ大
 臣の尊貴を以て寒僧のために靴を捧ぐるを耻ぢず而して政問あれば
 則ち或は往きて法要を問ひ或は招きて佛事を營む大伽藍を建つるあ
 り大佛塔を築くあり大法會を營むあり悲田敬田を設くるあり朝廷既
 に此の如きを以て嚴肅なる宗教思想は亦全國民の精神を動かして人
 情風俗何となく興床しく見ゆたりし也
 翻つて今日の上等社會なるものを看よ大臣宰相となりて一國の盛衰
 を雙肩に負擔するの位にありながら私利を營み蓄財を計るさへある
 に別墅を山水明媚の處に設け美姬を閑雅瀟灑の處に棲ましめて間あ
 れば則ち此に至りて聲色に沈湎す驕する所市井の賤夫にあらざれば
 花街の妖婦國家の大事を前に措きながら而かも這般の醜行をなして

(六)

緒

言

自ら磊落不羈物と拘はらずとなす上流社會の風紀既に此の如し勢の趨く所滔々として全國を風靡す詐偽を業とするもの賭博を事とするもの蓄妾を耻ぢぬもの花街に流連するを以て紳士の本色となすもの官職に在りて賄賂を貪るもの處女を辱かしめ寡婦を誑かし他人の妻を犯すもの世固より常に此種の人非人あらんされど社會に道德的制裁なるものありて之を監督せば決して甚しきこと今日の如きには至らざるべし然るに今や淫靡驕奢の風都となき鄙となき蕩々として人心を腐爛せんとするの勢あるを見れば社會は物質的進歩の下に墮落しつゝありと謂ふ非か

更に去つて社會人心の反影とも稱すべき文學美術を看上現今我邦の小説戯曲は大に進歩せりと云ふ人情の奧秘を穿ち人性の幾微を寫す頗る巧なりと謂ふ然れども吾人は未だ嚴肅なる宗教文學の出でたるを聞かず少なくとも宗教的眼孔を以て社會を觀察し人情を洞見した

緒

言

(七)

る文字に接せざる也是何の故ぞ又彫刻繪畫の方面を見るに是亦宗教的製作品の卓絶したるもの幾何を出したるか舊來の日本畫は西洋畫を折衷して一新機軸を生じたりと云ふさらば何が故に此思想によりて畫かれたる宗教的製作品は未だ見はれざるか或は花鳥或は山水或は歴史各特長の畫工ありと云ふに獨り宗教畫に至りて其人なきは何の道理を美術は個人的存在を離れたる人心の活現を寫すの要なきか文學は人心の最高最深最玄の發動を寫すの要なきか嗚呼何をこれ然らん只之を咀嚼し之を玩味するの社會なきのみ是にかいてか吾人は吾國民の無信仰なるを慨くの念轉々切ならざるを得ず

又請ふ試に我邦の家庭に入りて宗教の何ものなりや彼等の信仰の何れに在るかを問へ主人多くは答へて曰はん宗教とや貴下は何とてさせる抹香臭きことを尋ね給ふにや吾家には死せる人なし何ぞ宗教を須ひん且未來の事は吾が關り知る所にあらず吾は現在をこそ知らん

と思ふなれ如何にせば功名を博すべきか如何にせば収入を増加すべきか如何にせば位爵を高め得べきか世はつまり利功を以て第一義となすにあらざるや眞面目な宗教など云へるものを考へをりては明日の糧に窮するを如何にせん世間の交際に離るゝを奈何にせん是決して主人が嘲世罵俗の言にあらざる彼は正に此くの如く信仰して疑はざらんとする也

去つて之を細君に問はんか彼は曰ふ妾の母は寺に詣づるをもて老後の慰とはし給ひたれと妾は年尚若し寺に行かん世間に對して何となくさまりわろしよしや世の噂を厭はぬまでも家事は忙し兒供は大勢なり到底さる暇なきを如何にせん寺詣では老いての後にと我邦現時の家庭を支配せる女主人公が宗教に對する考は實に此の如く冷淡なり彼は宗教を以て世間以外に別天地を有するものと思へるならん

さらば我邦の未來を代表せる青年氣鋭の徒は如何なる覺悟を以て今後の精神界に立たんとするか試に彼等の胸中を忖度すれば曰く人生何ぞ宗教を説かん是はこれ閑人の閑事業のみ身を修め行を慎みだにせば天帝も佛も吾に於いて何かあらん吾等は學校にて科學の講義を聞けり未だ宗教なるもの果してありがたきや否やを知らず且看よ今日我邦の形勢は決して這般の閑葛藤を論ずるの時機にあらざるを是の如くにして宗教と曰へば老婆老爺の專有物の如くに思惟し國運の進歩道德の發達と何の關涉なきものと思惟し少年血氣の輩をして却て其銳氣を挫折せしむるものと思惟するは今日邦人一般の思想と云つて可ならんか

近頃に至り學者と曰はるゝ二三の博士は宗教に關する意見を公にしられども其意見は吾人を充分に満足せしむるものにあらず往々淺膚迂濶に過ぎぬかと思はるゝものさへあるに至りては世間尙未だ宗教

の眞意義を解せずと謂ふべきかある學者は曰く宗教は偉人の心的奴隷となる也宗教は中等以下の人民に必要なべしと其れ然り豈に其れ然らんや思ふに彼等は宗教を以て事實にあらざる想像臆測の組織と信じ眞理を自由に討究する學者の奉すべきものにあらすとさせるならんとはとに角宗教てふものゝ一般に知れわたらざるは確然たる事實也

さらば圓頂方衣の徒は如何と云ふに是亦俗より出で俗よりも甚しきもの其言行は殆んど毎に宗教を破壊せんばかり也彼等は最初に曰く家を出で父母を捨てたるは迷蒙の衆生を濟度して三界輪廻の苦を救はんがためなりと何ぞ其言の美にして宗教的なる一に此の如きや而して翻りて彼が平生如何を點檢すれば家を出でたりと曰ふも尙寺に住し父母眷屬を捨てたりと曰ふに尙妻妾を蓄ふ出家と在家と此の如くにして將た何の差別ありとすべきぞ

又試に其言ふ所を聞け貨殖の事にあらざれば漁色の事功名の談にあらざれば譏誣の説聊か考あるものゝ聞くを耻づることすら彼等の間には往々に公然として衆人稠坐の中に談話せらるゝ也身に三衣を着け佛前に向つて焼香捧花叩頭禮拜して木魚の音と共に「如是我聞」と唱へ出すときは如何にも殊勝氣に見ゆれどもさて衣帶を脱し晏坐して酒杯を把るときは滿酌鯨飲坊間の情話を打し遊里の閨怨を説く興愈々酣なるに及んでは亦言ふに堪へざるものあらん而かも彼等は此くして尙衆生の迷を轉じて佛陀の悟を開かしめんとする也大膽と言はば則大膽天下豈に亦是より大膽なるものあらんや

固より彼等の多くは自ら進んで三界の大導師とならんと欲したるにあらず幼少の頃前後のわきまへもなきに父母兄長の權利に抑壓せられて漠然として身を僧籍に委ねたるものなれば之を責むるは酷に失するの嫌なき能はざるべし然れども若し寺院の長老にして聊か宗教

的思想を有したらんにはこの思慮なき雜僧を化して大慈大悲の佛陀に誠に歸依するの弟子たらしむるも亦敢て難事なりとは言ふ可らずまして兒童のときは其思想頗る單純にして素絹の如くなるが故に之を染めて赤となし黄となし青となす只長老のなすがまゝならんにかいてをや又況して彼等が日夜に誦讀する所のものは佛陀の經典祖師の遺文皆彼等をして三界の大導師たるに足らしむべきものならざるはなきにかいてをや雜僧固より罪なかるべし只寺院の空氣が一般に宗教的感化を缺くにかいては僧侶たるもの争でか其責を分たすして可ならんや

宗教の問屋とも曰ふべき僧侶社會にして既に無宗教的なること此の如く又宗教の要一日も缺くべからざる普通人民の信仰にして既に無宗教なること此の如しとせば國家の基礎人心の歸着實に危険なりと謂はざるべからずア、危険なるかなく、彼等は紅爐上に安坐す

るもの爐中のマイナイト何時に爆裂して彼等を一齊に粉碎するを圖らざる也思へば快樂主義の波瀾滔々乎として大海嘯の如く一切を擧げて無宗教の曠野に彷徨せしめされば止まざるか

されど若し釋迦出世の本懷基督說法の精神をして普通人民の想像する如く棺木裏の枯骨を教ふもの學者(?)の臆測する如く善巧方便に止まるもの僧侶の行ふ如く或は寂寞無爲或は放逸遊蕩に導くものならしめば世に宗教はどつたらぬものはなかるべし所謂胡餅の上に安んじて之を狗子に與ふるも尙喫するを敢てせざるもの吾人亦何のために喋々呶々を弄することをせんや然りと雖吾人は宗教は決してさせるものにあらざるを確信す宗教は胸に十字架をかけ手に珠數を爪繰り口に「アーメン」と唱へ南無阿彌陀佛と稱ふるの邊にあるものにあらざるを確信す宗教は只死者のために沒義の陀羅尼を誦し無味の經典を讀み下す處にあるものにあらざるを確信す宗教は事實を離れた

る、想、像、臆、測、の、教、訓、に、あ、ら、ず、又、善、巧、方、便、の、詐、術、に、あ、ら、さ、る、を、確、信、す、否、
 吾、人、は、實、に、宗、教、は、本、來、活、潑、々、地、の、も、の、に、し、て、人、生、百、般、の、行、爲、を、支、配、
 す、べ、き、一、大、原、則、な、る、を、確、信、す、宗、教、は、天、地、亡、ぶ、る、も、人、類、滅、す、る、も、如、々、
 と、し、て、存、す、る、も、の、な、る、を、確、信、す、是、故、に、吾、人、は、微、力、な、が、ら、も、當、時、の、文、
 壇、に、立、ち、て、聊、か、其、信、す、る、所、を、述、べ、て、憚、ら、ざ、ら、ん、と、す、る、也、も、し、幸、に、
 此、一、小、冊、子、に、し、て、宗、教、の、精、神、を、明、に、し、て、我、國、民、の、迷、謬、妄、想、を、一、掃、し、
 物、質、主、義、の、危、險、を、論、破、し、信、仰、な、き、人、心、は、不、健、全、な、る、を、審、に、し、文、明、は、
 宗、教、な、く、し、て、完、全、な、ら、ざ、る、を、示、し、科、學、の、進、歩、と、宗、教、の、信、仰、と、は、相、容、
 れ、さ、る、も、の、に、あ、ら、さ、る、を、辨、じ、得、る、な、ら、ん、に、は、吾、人、の、希、望、や、足、れ、り、と、
 謂、ふ、べ、し、亦、何、ぞ、贅、々、た、る、を、須、ひ、ん、や、

故に本書は勉めて通俗平易ならんと欲す先づ世人の注意を喚起して
 宗教の何ものたるかを了解せしめんと欲す而して若し彼等にして一

且、悟、入、す、る、所、か、ら、ば、佛、教、徒、と、な、る、も、基、教、徒、と、な、る、も、孔、孟、の、流、を、汲、む、
 も、回、教、の、嶺、に、攀、づ、る、も、を、は、其、人、の、ま、に、く、な、ら、ん、の、み、さ、れ、何、れ、の、
 宗、教、も、其、意、を、充、た、す、に、足、ら、ず、と、せ、ば、自、ら、直、に、此、宇、宙、此、人、心、を、取、り、て、
 豎、に、窮、め、横、に、窮、め、て、自、家、獨、立、安、身、立、命、の、地、を、開、拓、す、る、亦、何、ぞ、妨、げ、ん、
 吾、人、の、望、む、所、は、只、世、人、の、反、省、靜、慮、を、促、し、て、其、心、底、に、眠、れ、る、一、大、信、仰、
 を、喚、び、起、さ、ん、と、す、る、に、在、る、の、み、

吾人は宗教の説明を大體に止めんと欲す東西の歴史に涉りて宗教の
 起因は恐怖の念にありし乎將た諫勵の心にありし乎寧ろ避苦の情に
 基きたる乎など云ふを研究せず又其發達は先づ多神教人體人性の神
 人を信するに始まりて次第に進化して或は二元教或は一神教或は凡
 神教となりたるかを講せず又綱を設け目を列ねて組織的に科學的に
 宗教の事實を研窮せず一言以て之を蔽へば本書の目的は宗教と云へ
 る人生の一大現象を歴史的科學的に闡明講究せんとするにあらず吾

人は寧ろ之を心理的通俗的に説明せんと欲す今の人動もすれば東西古今の學者の説を引用してカントは斯く言ひぬヘーゲルは然か説きぬ莊周は之れなしと辯じき朱熹は之れありと唱へぬ馬鳴龍樹はさ言はざりき智顛賢首は之を肯ひきなきも一たび見聞したることは悉く之を掲げ出して紙上を賑はさんとするもの少なからずされど吾人にはさせる深遠なる學才なく該博なる智識なし不朽の名著を述作して永く後世を益せんは自ら別に其人あるべし吾人が本書を以て江湖に見ゆんとするは我國今日の時勢に逼まられたれば也多數の讀者を得て吾人の微意を知らしめば則ち足れり學理を研究して新機軸を出すは吾人の事にあらず吾人は寧ろ常識を基として成るべく古人の語を引かず哲學の術語を用ひず以て所思を縷述せんと欲す苟も健全なる常識を具へたらんには此事の真相を觀破する敢て難きにあらざるべし

吾人は佛教徒也されど吾人の佛陀に歸依するは佛陀を以て眞理の創造者全智全能の唯一天神と思へばにあらず吾人は眞理の兩極未分以前よりして曠劫を経るども生滅するものにあらざるを知る佛陀の智徳と雖豈に能く一絲毫を添へんや吾人の佛教徒たるは別に故あり讀者もし本書を一讀し了れば吾人の佛陀に歸依する所以自ら明ならん本書の目的は公平無私の眼孔を以て宗教の本色を發揮せんとするに在りとは云へ説き來り説き去るの際自ら實地の問題に論及して基督教の是非得失を批判することあらん或は基督教を揚げ或は佛教を抑ゆ讀者請ふ吾人の佛教徒たる故を以て有心なるなかれ要は宗教と云ふ一點に在り基と佛とは暫く問ふを須ひざれ

吾人は尙是因地中の身なり敢て他の爲に廣長舌を弄して平地に波を

起すべきにあらす但、一片の志吾邦の精神界の日に月に寂寥たらんとするを見るに忍びず遂に發して此一篇を成す日々夜々工夫靜慮の餘暇を偷み思ふ所言はんと欲する所を一氣に述べたりたるものなれば固より其大體に於ては深く信じて疑はずと雖箇々細目の處に至りては或は尙切論を缺くものならん是等の箇處は他日好機會を得るに従ひて更に精細を加へんと欲す讀者先づ其大體を得て而る後細目の處に向つて批判を下さんことを

(●點は楞伽老師の附する所)

第二 宗教

諸塵緣境に牽惹せられ名言句數に纏縛せられて終生何の爲す所なく徒らに衣架飯甕となり了らば則ち已む荷も思を内に回らして天地人生の不可思議を觀するものは必ずや一たび胸中の未穩在なるを感せずんばあらず而して其之を感するや一種の煩悶鬱勃として起り宛然旋風の枯葉を捲くが如く大洋の洪波を翻へすが如く方寸裡を攪亂して止むことなし此時語らんと欲して語る能はず説かんと欲して説く能はず只何となく鬱憂の淵に沈みて呻吟苦悶せずと云ふことなけん是を宗教心激動の時節となす

古往今來何人か此種の感情なからん一時或は一生の間或る事情に礙へられて遂に之を發現するなきあらんも吾人は遂に其存在を疑ふ能はず猶黒雲一天を蔽へども太陽は其昭々の體を改めざるが如し殊にかの英雄豪傑と稱するものに至りては何れも一たびは激烈なる宗教

的、感、情、の、逼、迫、す、る、所、と、な、ら、ざ、る、は、な、し、た、と、ひ、彼、等、は、明、か、に、其、宗、教、的、
 な、る、を、自、覺、せ、ず、と、は、云、へ、而、し、て、歴、史、は、僅、に、英、雄、の、外、形、的、事、業、を、の、み
 描、出、し、て、其、心、理、的、經、過、を、詳、に、せ、さ、る、が、故、に、書、を、讀、む、も、の、一、隻、眼、を、具
 へ、て、紙、背、を、洞、見、す、る、に、あ、ら、ざ、れ、ば、此、間、の、消、息、を、得、る、こ、と、難、し、さ、れ、ど
 所、謂、る、宗、教、家、な、る、も、の、に、至、り、て、は、明、か、に、此、時、節、あ、り、し、を、認、め、得、べ、き
 な、り
 之、が、例、證、と、し、て、最、初、に、擧、す、べ、き、は、釋、迦、牟、尼、な、り、身、は、一、天、萬、乘、の、家、に
 生、れ、て、人、間、一、切、の、欲、望、を、充、た、す、べ、き、位、置、に、あ、り、な、が、ら、之、を、棄、つ、る、破
 草、鞋、の、如、く、飄、然、王、宮、を、出、で、深、山、幽、谷、の、中、に、隱、る、何、と、な、れ、ば、金、殿、玉
 樓、の、中、美、人、側、に、侍、し、嘉、肴、前、に、列、な、る、も、此、心、の、煩、悶、を、休、む、る、に、足、ら、ざ
 る、ら、ば、な、り、樹、下、石、上、一、衣、一、鉢、食、飢、に、充、つ、る、に、足、ら、ず、衣、寒、を、凌、ぐ、に、足、ら
 ざ、る、も、此、心、の、苦、み、に、は、比、す、べ、く、も、あ、ら、ざ、れ、ば、な、り、彼、が、六、年、の、辛、酸、苦
 修、を、飴、の、如、く、に、思、ひ、し、を、見、れ、ば、そ、の、宗、教、心、の、激、動、の、如、何、に、烈、な、り、し

か、を、推、知、す、る、に、餘、あ、ら、ん、乎。
 達、磨、の、漢、土、に、入、り、て、佛、心、宗、を、唱、ふ、る、や、先、づ、梁、の、武、帝、に、見、ゆ、て、契、は、す
 乃、ち、魏、の、少、林、に、隱、れ、て、面、壁、九、年、す、時、に、惠、可、な、る、も、の、あ、り、此、心、未、だ、休
 歇、を、得、ざ、る、を、以、て、少、林、の、爐、鞴、に、入、る、こ、と、幾、星、霜、一、夜、膝、を、没、す、る、の、雪
 中、に、立、ち、て、凝、然、工、夫、を、下、す、純、一、な、り、遂、に、一、臂、を、斷、じ、て、之、を、達、磨、の、面
 前、に、抛、向、す、る、に、至、る、當、時、彼、が、安、心、を、求、む、る、に、急、且、切、な、る、喪、身、失、命、を
 避、け、ざ、り、し、も、の、あ、り、た、る、を、知、る、に、足、ら、ん
 馬、哈、鳴、德、は、回、教、の、祖、な、り、其、身、始、め、は、商、賈、の、間、に、伍、し、て、東、風、西、水、唯、利
 を、計、り、益、を、收、む、る、に、忙、し、か、り、し、に、一、朝、這、裏、の、未、穩、在、な、る、を、感、ず、る、や
 復、此、に、專、ら、な、る、能、は、す、遂、に、茫、々、た、る、沙、漠、の、中、に、暈、れ、て、食、を、絶、ち、寢、を
 わ、す、れ、て、箇、事、を、研、鑽、し、た、り、他、日、彼、れ、が、神、命、を、受、け、神、意、を、宣、揚、す、と、稱
 へ、て「コ、ー、ラン」を、白、刃、と、を、揮、り、ま、は、し、た、る、は、實、に、此、の、間、よ、り、得、來、れ、る
 大、信、仰、大、決、心、に、由、ら、ず、ん、ば、あ、ら、ず、彼、等、當、時、の、煩、悶、熱、亂、を、追、想、せ、ば、寒

毛卓豎するを覺ゆるべし

基督が青年の歴史は暗黒なり是を以て彼は如何にして最も活潑に最も有爲なる時代を過せしかは明かに知るを得ずとは云へ彼が如き大事業を営まんには是非相應の大準備なかるべからず思ふに彼が歴史の暗黒なる部分は大煩悶大苦惱大奮發大精進の時代なりしならん此身を捨て此心を捨て此天地を捨てたる時代なりしならん是等は其顯著なる例證にして何人も熟知する所なり然り而して宗教心の發動には頗る大小深淺の差別ありて各人皆一樣ならず一様ならずと雖其發動は何人も抑壓する能はざる所にして早晚之がために多少の苦悶を喫せずんばあらず今之を生物界意識發現の狀に比せん乎釋迦牟尼の如きは宗教心の最高度に發現したるものにして猶人類の意識の如しと謂ふべし人類より下りて牛馬犬猫の族に至れば意識なきにあらざれども其發現漸く微弱なり而して愈下りて魚鳥の類昆蟲

の類原蟲の類に至れば其發現愈々微にして僅に觸れて感じ感じて動くこと云ふに過ぎずかの植物の如きに至りては亦言ふに足るものなし今最下級よりして直に最上級を見れば殆んど別物の觀われども仔細に序を逐ひ次を尋ねて點檢し來れば一級は一級より僅かに其度を異にするのみなるを發見すべし宗教心の發動も亦然り平々凡々の漢は猶ほ「アメン」の意識の如き乎之を釋迦牟尼の如きに比すれば日中の斗も管ならず然れども是を以て彼等には何の意識もなく何の宗教心もなしとは謂ふべからず(人類の發微の間に宗教的思想を發現する事實は人の草下に就て看よ)

さらば凡庸漢は何の故に宗教的感情を動かすこと微弱なる乎天霽れ日麗かなるときは鳥は空氣の蓋天蓋地なるを覺ゆる風靜に波穩なるときは魚は江水の頭上脚下に漫々たるを知らず何となれば物皆其適する所に相忘るればなり然れども一朝滿天の黒雲地に垂れて

暴風虚空を捲きて起り家を倒し樹を抜くときは始めて空氣の身邊に在るを悟る濁浪空を拍ち狂瀾天に漲りて舟を覆へし人を没するとき始めて此身の水中に在るを知る庸人凡夫が宗教心の發動を感せざる如くに見ゆるも亦復此の如し
 思ふ所行はれ言ふ所聞かれて順風恬波に帆を挂ぐるときは五官外縁に牽惹せられて回光返照する能はず十二時中營々として他の役する所となる是時に當りて信仰を説く眞に是馬耳東風彼等亦一片の宗教心をだに有せざるの觀あり然れども一朝天運の運道に會ひて心事齟齬軋軋敷奇なるときは則ち天を怨み人を怨みて徒らに煩悶せずと云ふことなし是に於て乎神を説かざるに神を求め佛を教へざるに佛を頼む蓋し凡庸なるものは這般窮迫の時期に到らざれば永夜の迷夢を驚破する能はざるなり然るに今宗教を以て苦を避け樂を喜ぶ人心の弱處に投じたるものとなさば豈に此處あらんや

「イ」

宗教的感情とは何の謂を吾人をして先づ宗教の何ものなるかを説かしめよ

蘇格蘭スコットランドの大人阿雷兒カーライル曰く宗教は個人のみならず亦國民生涯の一大事因縁也されど吾人の所謂宗教は教會の信仰個條寺院の獨斷的教義を云ふにあらず反て毫も是等と相關せざると屢之れ有唯人間が實地に信奉する所のもの而して此事たるや自らも識認するなきとあらんまして之を外に詮表するに於てをや實地心靈秘奥の處に横はり彼をして是不可思議なる宇宙と相關係して其本職と運命とを構成する所以を確認する所のもの其人に在りては常に至極究竟の一大事に於て其萬行の由りて以て確立する所のもの是之を名づけて其人の宗教となす其懷疑主義にせよ其無宗教主義にせよ其傾向如何は問ふ所にあらず不可見の宇宙といはん乎無宇宙といはん乎只彼が這箇の一

物に對して一種不可思議の心靈的關係を有する所以を感得す是即ち宗教の在る所と

阿カライ雷兒の宗教を説く頗る明晰なりと謂ふべし有限の無限に對する無常の不變に對する我の無我に對する部分の全體に對する生滅の不生不滅に對する有爲の無爲に對する個人的生命の宇宙的生命に對する關係を感得す是これを宗教と謂ふ故に彼と此我と汝との隔壁を打破して萬里一條の鐵の如く平等無差別の境涯に入れるときは則ち宗教の生命を得たる時と謂はざるべからず我を忘れ人を忘れ天地を忘れ一切を忘れて忘又忘の極に致るにあらずんば到底宗教の何たるを解すべからずかの個人的存在を以て唯一實體となし此外一物もあらずと思惟するは非宗教のきはみなり之を正法を謗るものとなす豈鬱迷悶遂に已まざるは此我執の妄念を一掃せざればなり人心の奥底に秘在せる宇宙的生涯を覺知せざれば也我は無我と争ひ個人は宇宙と争

ひ有限は無限と争ふ此争にして定まらずんば這裡何の日か安穩なるを得ん蓋し人心は畢竟個人的存在を以て満足する能はず必ずや宇宙的存在を覺知して本來具有の性に歸せざんば休せざるなり乃ち知る宗教的感情は個人的存在の桎梏を脱却して宇宙の靈氣を呼吸せんとするの情なるを又知る乾坤崩るゝも吾疑はざるの大信仰を得大休歇を得んとするの情なるを又知る窮困に處しても恬如として憂へず榮達に處しても泊然として驕らず順逆縦横卷舒自在ならんとするの情なるを又知る水の洋々として流るゝが如く風の嫋々として吹くが如く毫末の繫縛なからんと欲するの情なるを又知る咳唾掉臂同尿送尿皆一切と關係する所以を會せんとするの情なるを又知る天上の小星も地上の一莖草も皆無限の意義を有し人生の哀樂悲喜亦等閑の因縁にあらざる所以を悟らんとするの情なるを

宗教的感情の目を列擧すれば大抵此の如きものありと雖其初め安心

立命を求めんとするに當りては果して這般の情緒に逼迫せられつゝ
ありや否やを自覺せざることを往々にして之れあり但此の如きは一た
び大休歇の田地に到りて而る後更に眼を天理人事の上に轉じ去りて
當に始めて其然りし所以を會得するなるべし東坡の詩に曰く

横看成嶺側成峯

遠上高城無一同

不識廬山真面目

只緣身在此山中

由是觀之宗教の精神は世の所謂宗教なるものと大に逕庭ありと謂ふ
べし世人往々宗教を以て獨斷妄信と同一視して以爲らく其神話と其
獨斷的信仰と其妄信的儀式を取り去りて宗教の面目を求めんと欲す
豈に得べけんや蓋し宗教なるものは宇宙を説明するに科學的方法に
由らず妄誕無稽の奇蹟化身天啓などの説を以て愚民を籠絡し又獨斷
的信仰箇條を列記して之を絶對争ふべからざる底の眞理となし以て

科學的考究を否拒し又神佛の歡心を買ひて其不思議の冥助を求めん
ため一種神怪奇妙の儀式を具へよと教ふ而して是實に宗教の本色た
り若し此以外に何物か之れありと云はばそれは宗教に屬せずして寧ろ
哲學に屬するものならん即ちかの宇宙に對する畏敬の念及び可見的
世界以外に存在する宇宙的理想に到達せんとの希望此兩者は從來宗
教の中に渾融して殆んど宗教其物の本體の如くに思はれたれど元來
は哲學の領内に入るべきもの獨斷妄信と何の關涉かあらん故に此兩
感情の永遠無窮なるは哲學も之を拒む能はずと雖宗教に至りては科
學の進歩に隨ひて次第に湮滅す遂には其隻影をも留めざるに至らん
乎と

されど吾人を以て之を見れば只是れ名字の議論に過ぎざるのみ彼等
は宗教の真相を以て迷信天啓儀式の裡に在りとなし而して其科學の
發達に隨ひて次第に變遷し轉化するを見て宗教も亦亡滅に歸すべし

となす是れ宗教の意義を極めて狹隘に解釋したるものされど吾人は宗教を以て時と處との變化遷移に従ひて其形骸を千狀萬態にすれども其眞髓に至りては歴劫變ることなしとなすの寧ろ剴切なるを覺ゆ故に正眼に看來れば或は宗教或は宇宙的感情或は宇宙的理想其名字の何たるは問ふ所にあらず但箇の一眞實は妄想迷信の産出物にあらずと云ふを悟らば則足れる也固より箇の一眞實は始めより赤條々に認識せられたるにあらず大底多少迷妄の見解の之に附帶するあり是を以て往々識者の疑惑を惹起したりと雖其垢を除き其塵を拂はゞ宗教の本體自ら皎々たるを見ん信仰箇條の如き儀式形相の如き豈に宗教の精神となすに足らんや

是に於てか吾人は宗教の妄想分子と眞實分子即ち合理性と非合理性とを甄別するの要ありと信す況んや宗教は人生の一大事因縁なり安

身立命總てその上に懸れりとせば或は一步を誤りて千仞不測の溝壑に陥り四肢滅裂し肝腦地に塗るの奇禍あらん乎識者すら宗教と妄想とを同一視するに於ては滔々たる愚民如何ぞ能く宗教の眞實分子を看破せんや故に吾人は宗教的感情を涵養せよと云ふと同時に理智の研究をわするなかれと叫ばんと欲す

宗教的感情のみ激烈にして之を鑒識する哲學的能力に乏しき時其如何ばかり人心を誤るかを知らんとならば試みに古代の宗教を看よ人智蒙昧の頃は人體人性的天帝の碧落の上に棲息するありて其怒に觸るゝ時は雷霆乾坤を震はし其喜を買ひ得たるときは五風十雨時に隨ふと信す天理の運用すら尙天帝の掌裡にありと思へる蠻民の人事の吉凶禍福を以て悉く其方寸より案出せらるゝものとなすは自然の勢ならん是故に彼等は只管神人の逆鱗に觸れて禍孽の身に及ばんを怖れ或は樂を奏して舞をなし或は讚美の歌感謝の詩を捧げ或は生物を

殺して血肉を供へ或は幼児を屠りて神人を饗するなど之が歡心を買はんがためには手段として盡くさすと云ふことなき也其迷妄なる頗る憐ひべしと雖動物を殺し人類を屠るに至りては不倫も亦甚しからずや彼等が一種の宗教的感情を有するは則ち善し但經驗未だ深からず理智未だ明らかならざるが故に瓦礫を以て精金となし糞土を以て明珠となし碧血を拭はんとして却て碧血を流し罪業を贖はんとして却て罪業を犯すさらば宗教の決して智恵以外に立つべからざるや愈々明なりと謂はざるべからず

何を以て宗教の妄想分子と眞實分子即ち合理性と非合理性とを鑿査せんとする乎

とは言ふまでもなく吾人は日常内外の經驗に由らざるべからずと思ふ天啓と曰ひ奇蹟と曰ひ超自然と曰ふも若し吾人の經驗に背き自然

の事實に稱はずんば半文錢の價值だになかるべし水は必ず低きに流れ火は必ず乾けるを焚く春は百花枝に満ち秋は千山水落つ是の如きの經驗に由りて是の如きの道理を知る亦多子なきなり故に宗教は哲學科學と相關係すること頗る深し二つのもの始より相待たずんばあらす固より宗教は事實なり哲學科學は説明なり説明は以て事實を左右すべからずされど吾人は其事實を知覺するに當りて往々迷妄の見解の之に附帶せるを知らざることあり譬へば今一本の竹竿を水中に入れんに水面より之を見れば其竹竿の水中に入れる部分の曲折せるが如きを認むるならん視覺の告ぐる所は實に斯の如しと雖竹竿は則ち依然として毫も曲折なきなりさらば視覺は客觀的事實に相違せりと謂はざるべからず曲折は視覺の實に感ずる所なれども其感ずる所は事實にあらず故に今一箇の感覺ありて其果して事實に相應せりや否やを知らんと欲せば必ず自餘の感覺と相比较して研究せんを要す

而して此比較研究は哲學科學の本職なるを知らば宗教も亦獨立にて其光明を赫かし難かるべき乎尙詳細は「宗教と哲學」「宗教と科學」の兩章に説明すべし今はこれを以て満足せんことを望む

此に至りて吾人は讀者の注意を喚起すべき一件あるを覺ゆ何ぞや吾人の今宗教を以て科學哲學と相提携すべしと云へるがため讀者或は速了して「さらば宗教は只理論に根據して存在するもの乎」と云はん宗教の眞面目を會せんとせば先づ此問題を解釋せざるべからず吾人の見る所を直截に述べれば宗教は直下に會する處に在り脚實地を踏著する所にあり許多の道理許多の説明皆是れ第二義の事宗教は決して斯かる閑葛藤の裡にあらざるなり譬へば倫理學と道德との如し倫理學は只道德の事實を説明するに在るのみ道德其物は決して倫理學の中に踰跡するにあらず大學の教授は倫理學を講述して委曲明

晰餘蘊なかるべしされど彼は道德家にあらず或は不徳を行ふことあらん彼が講筵は彼の道德と必ずしも一致するなきなり道德は學問以外説明以外に在りて別天地をなす宗教亦た豈に説明の上文字の裡道理の邊にあらんやさはいへ宗教を以て道理に反き説明を拒むものとなさば是亦事實にあらず要は唯即せず離せざる所にあるのみ世人動もすれば曰ふ宗教にして果して道理に背かず説明を拒まずと云らば之を會する何を必ずしも直下と曰はん論理に由り言詮に由りても亦其意を會し得ずとせんやと是れ所謂學者なるもの、僻見となす看よ物皆這妙機を有せり一箇の頑石之を左に推せば左に仆れ右に推せば右に仆る其間毫釐の擬議を容れざるにあらずや蓋し妙機の發する所は天魔鬼神も其端倪を窺ふ能はざるものあれば也頑石すら尙且つ然り況んや有情の生物においてをや況んや宇宙をも包める一大玄理においてをや這裡の消息は實に言詮路布の及ぶ所にあらず豈に

宗

教

道理に由りて會するの餘地あらんや
 宗教は一大眞實なり而かも客觀の上にあらず主觀の上にあらず主觀
 と云ひ客觀と云ふ總て是れ了知分別なり而して了知分別は是れ意識
 の上の發現のみ宗教の眞面目は此を去三千里今夫れカント、ヘーゲル
 は近代の大哲學者也其所述縷々數萬言思ふに天地の玄妙理義を説き
 盡くして遺憾なかるべし然れども太平洋は依然として深く雪山は舊
 に依りて高し吾人未だ彼等の所説に由りて天地一絲毫を添へ又一絲
 毫を減じたるを聞かずニュートン、ダーウヰンは近世紀における大科
 學者なり重力の規則進化の理法を發見して始めて古來の迷蒙を開示
 したり吾人も亦彼等の恩澤に由りて智識の倉庫に一寶財を加へたる
 を多謝す然れども適者生存重力牽引の事實は往古よりして之れあり
 しなり元來是れ恁麼の道理彫琢を假らず安排を加へずさらば宗教は
 以て理論の外に擱歩すとせん乎將た文字の裡に踟躕すとせん乎

宗

教

吾庭前に一株の梅あり春風徐るに來りて殘雪を拂ふ頃となれば南枝
 先づ蕾を破ること兩三それより次第々に開きそむれば清香馥郁窓
 前窓後に満ちて快爽言ふべからず此時梅樹新に一物を添へ得たりと
 せん乎
 夏去り秋來れば梧桐先づ落ちて冷氣人に逼る維葉萎々たりし梅樹も
 一葉々に飛び散じて枯枝悲風に嘯けば春時の面目杳として復求む
 べからず此時梅株別に一物を殺ぎ去られたりとせん乎何ぞ其れ然ら
 ん清香紛々の花枝は即是れ黄葉脱盡の枯枝黄葉脱盡の枯枝は即是清
 香紛々の花枝榮華の時に其全體を脱露し凋落の時に其全體を脱
 露す梅樹の梅樹たる所以は榮華と凋落とに關せざるなり此間の道理
 を仔細に玩味し來れば宗教の面目豈に脱捕し難しとせんや
 故に宗教は實地を貫ぶ否宗教の本分は實地を離れて一物もあるなき
 也實地とは何ぞ直下に會するなり文字言詮に由らず道理分別を假ら

すして、蒸直に、觀破するなり。宗教にして、此一事ならん乎、何時にか、歸家
 穩坐の好時節あらんや、哲學科學は、或は客觀的に、或は主觀的に、天地萬
 物を研究して、餘蘊なかるべし、されど、只這一著子を、缺くが故に、人をし
 て、立脚の地を、獲せしむる能はず、科學は、經驗を本とせり、經驗は、一切智
 識の源泉也、さらば、科學は、依據するに、足るべきは、なからん、されど、科
 學の伽藍は、意識の上に、建立せらる、意識未だ、内に現はれず、塵境未だ、外
 に、分れざる、ときは、この何を呼んで、か、科學と曰ひ、智識と曰はん、プラト
 ンも、ペーコンも、此に至りては、又技術の施すべきなきを、奈何せん

難者或は曰く、もし直下々々と説かば、まづ人類に、天地一貫の大道理を
 直覺すべき能力あることを、假定せざるべからず、然れども、是れ頗る疑
 はし、吾人は、何に由て、人類に、此能力ある所以を、證し得る乎、經驗の世界
 には、一個の假定説をも、容るゝ能はずと

火に觸るゝときは、直下に、熱を感じ、水に觸るゝときは、直下に、冷を感じ、
 吾人豈に、先づ、冷熱を感じるの、力ありや、否やを、定めて、而る、後、冷と感じ
 暖と感ずるの、違あらんや、今論者は、何に由りて、先づ、能力の有無を、定め
 んとする乎、人類には、果して、直覺的能力の有無を、判すべき能力ある乎
 既に、直覺と云は、道理の極處にあらずや、極處を、超へて、更に、一步を、開
 拓せん、とす、是、寧ろ、不能底の事ならざらんや、且、若し、一切を、疑ふと、曰は
 ば、疑其物をも、亦、疑はざるべからず、一切を、疑ふは、則ち、可なり、疑其物を、
 疑ふは、則ち、非なりと、云は、矛盾も、亦、甚しと、謂ふべし

今劍の利鈍を知らんとせば、必ず一たび之を實地に、試みざるべからず
 馬觸れて、馬を斬り、人觸れて、人を斬る、乃ち始めて、稀代の名劍なるを知
 るべし、徒らに、その光芒の、陸離たるを見、其裝飾の、燦爛たるを見て、其利
 鈍を、判せんとす、恐らくは、鑒識の未だ、至らざるもの、あらん、固より、吾人
 は、之を實地に、試みざるも、推斷して、其利鈍を知ることありと、雖をは、吾

人が以前に蘊藉したる経験に由りて之を類推するに由る即ち嘗て一たびは之を實地に試みたればなり智識も亦然り経験に會ふて始めて其力あるを知る経験なくして之を判せんとするは是れ劍を試みざる也疑問は寧ろ何故に劍は利なる乎智識は眞なる乎と云ふに在りされど是は智識論の問題にして吾人の今此に論せんとする所にあらず

●思ふに文字言證を以て傳ふべきもの他人の手を假りて會得すべきものは宗教にあらずユークリッドは幾何學を組織したり而して今日は中學の生徒も之を能くすコペルカスは地球の運轉を説明したり而して今日は小學の兒童も之を知れり蓋し科學は文字言句によりて傳授せらる古人が學生の力を竭くして經營慘憺の後發見したる宇宙間の大理法も後人は文字に由りて容易に之を知悉す却て古人の愚なりしを笑はんとするものあり但宗教は決して文字言句の所傳にあらず

古人今人共に多少の血涙を以て之を求めざるべからず釋迦基督の大慈悲と雖吾人のために一物を付與し得たるにあらずかの一大秘庫を開かん欲せば必ずや各自に本來具有の能力を奮つて之に當らざるべからず若し他人の手を借りて此安心を得んとせば驢年に到るも遂に此處あることなけん

昔阿難陀は佛在世の時多聞第一を以て稱せらる四十九年の說法聞かずと云ふことなし而して迦葉波の第一結集をなすや阿難陀を斥けて容れずは何の故ぞ四十九年の說法悉く之を記すとせば結集會の首位を占むべきは阿難陀にあらずして誰ぞ迦葉波の何の見る所ありてか之を斥けんとはしたる他なし彼未だ宗教の眞面目を見得せざりしなり直下に會するの事あるを知了せざりしなり阿難陀すら尙且然り況や彼の露々たるもの如何を能く這裡の消息を知らんや

文字言句は猶旅行記の如し曰く瑞典の山水は歐洲の絶景なり曰く埃

及の砂漠は茫々として太平洋に似たり曰く巴里の繁華は歐洲文化の中心なり曰く以太利の美人は窈窕仙の如しとたどひ韓蘇の筆を假りて其山水を描き其人情を寫す如何に精巧周到なるも畢竟是畫餅飢に充らず豈に曾是のみならんや甚しきは指を以て月となし鐘を喚びて甕となすに至らん乎若し安心にして旅行記的安心に止まらしめば天下豈に宗教はと迂なるものあらんや

吾人は結論すべし宗教心の發動は其人の境遇其人の遺傳によりて早晚深淺の差ありと雖是非一たびは一種言ふべからざるの苦悶を経験せざるべからず而してこの苦悶は個人的存在の繫縛を脱却して宇宙的存在に冥合せんとするより生ず孔子曰く三十而立四十不惑と若し通常の境遇に在るものならば大抵二十歳より三十歳の間において此心の未穩在なるを覺知し三十歳より四十歳の間において休歇の地に

到るならん其安心の深淺強弱は宗教的感情發動の度に比例すと謂ふべし即ち刹那の安心もあらん數年の安心もあらん乾坤崩るゝも動かざるの安心あらん農夫は耕耘の間にて安心すべく商賈は黃白の裡にて安心すべく學者は文字葛藤の上にて安心すべし要は道理を離れず道理に背かず文字言句の中において文字言句に纏縛せられず蒸然として猛進するに在りとなす若し一朝情識妄想の窟宅を撃碎して直下に這箇の一物を覘捕し來れば天體の運行する所以山河草木の羅列する所以喜怒哀樂の相續する所以善惡禍福の往來する所以歴然として目睫の間に現出せん即ち昔日の苦悶今や却て一場の好笑となるあらん乎是に至りて呶々數千言を費す雪上に霜を加ふるの感なき能はず

第三 神

神と云ふ語は頗る穩當と缺けり殊に佛教に在りては之を説くの必要なしされど基督教と云ひ回教と云ひ何れも常一主宰の天帝なるものを建立して宗旨の中心となすが故に其名稱の如何は暫く論せずとするも宗教を説かんには必ず此一章なかるべからず吾人は神と曰はんよりは寧ろ或は眞實或は眞理と曰ふを以て穩かなるべしと思ふされど是は餘り科學的に過ぐるを以て在來の宗教的用語に慣れたるものは或は惟訝の感を抱くあらん乎是を以て吾人は暫く神の語を利用して諸宗教の中心點となれる一物を示さんと欲す

神とは如何なるものを先づ有神論者の位置に立ちて觀察すとせよ仰ぎて天を望めば日月星辰懸れり大小長短各光を放ちて燦然月は地球を廻り地球は太陽を廻り太陽は又他の太陽を廻る轉々循環して窮

まる所を知らず一見甚だ紛糾錯綜するが如しと雖仔細に點檢すれば悉く一定の軌道を走りて其の外に逸出せず月は十五日毎に盈虚し日は二十四時毎に出沒す(且く俗解にまかせ)春去り夏來り秋往き冬還る四時期を誤らず一年三百六十五日今猶昔の如し思ふに是豈に偶然ならんや必ず當に一人の機關手ありて天體をして運轉自在此の如くならしむるなるべし

俯して大地を瞰れば山河草木禽獸蟲魚流るゝものは渾々として晝夜を捨てず盤ゆるものは巍々として終古渝らず飛ぶものは飛び走るものは走り躍るものは躍る草は菁々として九野に滿ち木は森々として四山に榮ゆ若し果あれば必ず因ある是れ天地の大原則とすれば森羅たる萬象創造者なしとは思惟し難きに似たり
意に順ふものあれば欣々として喜び逆ふものあれば憤々として怒る行かんと欲すれば山水を厭はずして跋渉し止らんと欲すれば則日未

だ落ちざるに宿を求む柳を見ては是緑なるを知り花を見ては是紅なるを知る手に在りては執捉し足に在りては運奔す頂天立地の動物亦奇恠ならずや彼果して何の處に這般の妙用を傳へ來りたる乎彼果して偶然に出沒し徒爾に往來する乎思ふに彼が執りて以て原型となせる不可思議の一物あるなからんや

是の如くにして外萬物を觀内人心を察す不變不動の道理其間に貫通して一絲亂れざる也蓋し所造物あれば造物者なかるべからず秩序あれば制定者なかるべからず若し宇宙にして果して偶然の事業にあらざとせば此整然たるものを如何にせんとする乎乃知る天帝なるものありて天地を創造し萬物を主宰し自己の肖像に模して人間を造りたるを是これを有神論第一の基礎となす

然世相を觀するに常住不變なるはなし朝に桃李の粧ありて夕に白骨

となるは言ふまでもなく百花競ひ開きし春の景色も秋風一陣先づ梧桐より起れば千山の萬木枯槁凋落して復見る影もなし羅馬の帝國巴比倫の繁昌當時は千歲萬歲より無窮に傳ふべしと思ひたらんも今は悲風蕭條として荒野人なし旅客僅かに古墳舊趾を尋ねて昔時を追懷するのみ富貴も持むべからず美人も持むべからず山川も持むべからず日月星辰の燦然たる禽獸草木の森羅たる而かも劫火洞然として大千世界を燒き拂はし是亦舊態を止めんや諸行は無常なり萬法は生滅せずと云ふことなし而して人心は到底世間有爲法を以て満足する能はず只管常住不變の一物を覓めて止まざるなり

且それ善あれば惡あり是あれば非あり彼あれば此あり境あるが故に心あり心あるが故に境あり力は物なしに存在すべからず物は力なしに存在すべからず物と力心と境兩者始めより相待たすんばあらず畢竟するに世は偶對なり故に轉變して已む期なし而して人心は偶對の

満足する所にあらず必ずや絶対獨存の一物を把握するにあらざれば、決して休するなき也。是に於て乎宇宙別に不生不死絶対獨立のもの存在せざるべからず無常轉變の外に卓立して終古渝らず偶對相待の上に超絶して獨立獨存するものなかるべからず思ふに造物主は必ず此力を有せん彼既に一呼して天地を現出するの技倆あり且能造者たるもの所造者の轉變に伴ふて轉變するの理あらんや故に知る天地の創造者は即ち不生不滅ならん絶対獨存ならん是を有神論者が第二に神の性質の無限なるを論するの根據となす

神既に絶対無限なり彼亦至公至平なるを得る乎

人生固より痛苦あり罪惡あり極樂淨土は未だ此惑星の上に来らざるなり飢うるは苦なり凍ふるは苦なり老ゆるは苦なり病むは苦なり死

するは苦なり善必ずしも榮はざるは惡多きがため乎正必ずしも勝たざるは邪強きがため乎若し果して全智全能の神ありたらんには何故に人生をして坦々砥の如くならしめざりし乎世に苦あり惡あるを見ればたとひ天地創造の神なりとするも人生と交渉せざるに似たり人生と交渉なくして神を説くは痴人夢を説くの類なるべし是に於て乎有神論者は第三に神の至平無私必ず善に與するを説く有神論者は思へらく苦なければ樂なし惡なければ善なし吾人が身を亡ぼすの禍害に接するや直に之を迴避して自ら全うする所以は實に苦あるによる若し此身を害し此生を亡ぼすべき勢力にして苦痛の之に伴ふなからんには一切の有情は既に亡びたるや久しと謂ふべし況んや貧賤患難の如きは却て人心を刺激して之をして玉成せしむるの實あるにおいてをや

且それ慈母が偶然の過失に由りて其愛兒を非命の死に終らしめたる

は、痛、苦、の、甚、し、き、も、の、也、さ、れ、ど、若、し、其、母、の、祈、禱、に、よ、り、て、愛、兒、の、再、生、す、
 る、あ、ら、ん、に、は、是、更、に、非、理、の、甚、し、き、者、な、ら、ざ、ら、ん、や、善、人、あ、り、錯、り、て、物、
 理、界、の、法、則、を、犯、し、た、る、た、め、忽、ち、其、生、命、を、失、ひ、た、る、は、痛、恨、の、事、な、り、さ、
 れ、ど、若、し、物、理、界、の、法、則、を、犯、し、な、が、ら、致、死、の、之、に、伴、ふ、な、か、ら、ん、に、は、是、
 更、に、非、理、の、甚、し、き、も、の、な、ら、ざ、ら、ん、や、全、體、の、規、律、を、保、維、せ、ん、が、た、め、或、
 は、其、一、部、を、殺、盡、す、る、の、止、む、を、得、さ、る、は、實、に、神、の、至、公、至、平、な、る、に、憑、ら、
 す、ん、ば、あ、ら、ず、

た、と、ひ、一、個、人、の、上、に、お、い、て、善、惡、應、報、の、理、明、か、な、ら、ざ、る、こ、と、あ、ら、ん、も、
 善、は、最、後、の、勝、者、な、り、惡、人、如、何、に、一、時、の、顯、榮、を、極、む、る、も、天、理、は、決、し、て、
 其、永、續、を、許、さ、ず、或、は、一、世、或、は、數、世、惡、し、き、も、の、は、必、ず、無、間、地、獄、に、墮、落、
 せ、ず、と、云、ふ、と、な、し、一、個、人、然、り、一、國、家、然、り、全、世、界、然、り、此、理、未、だ、否、塞、し、
 れ、る、を、見、ず、苦、し、き、障、礙、の、あ、る、に、も、拘、は、ら、ず、恐、る、べ、き、誘、惑、の、あ、る、に、も、
 拘、は、ら、ず、恨、む、べ、き、失、敗、の、あ、る、に、も、拘、は、ら、ず、天、地、は、常、に、善、に、與、し、て、惡、

に、與、せ、ず、人、心、は、常、に、善、を、求、め、て、惡、を、求、め、ず、知、る、べ、し、神、慮、の、深、且、大、な、
 る、や、殊、に、荊、棘、榛、莽、を、人、生、の、行、路、に、植、ゑ、て、吾、人、を、し、て、玉、成、の、域、に、到、ら、
 し、め、ん、と、す、る、を、然、ら、ば、苦、と、惡、と、の、世、に、存、す、る、所、以、は、神、の、無、慈、悲、を、證、
 據、せ、ず、し、て、却、て、其、公、明、正、大、な、る、を、暴、白、す、と、謂、は、さ、る、べ、か、ら、ず、

有、神、論、者、は、更、に、一、步、を、進、め、(第、四、に)人、心、の、裡、面、を、究、め、て、而、し、て、其、有、神、
 說、を、確、め、ん、と、欲、す、曰、く、そ、れ、人、窮、す、る、と、き、は、則、ち、必、ず、天、を、呼、ぶ、志、を、盡、
 し、て、君、に、容、れ、ら、れ、ず、同、輩、に、斥、け、ら、る、と、き、は、天、道、是、か、非、か、と、怨、み、善、
 を、な、し、て、却、て、凶、禍、を、受、け、正、を、行、ひ、て、却、て、災、害、を、蒙、る、と、き、は、神、も、な、し、
 佛、も、な、し、と、憤、る、乃、知、る、人、類、が、先、天、的、に、一、個、の、信、仰、を、有、す、る、と、を、彼、等、
 自、ら、知、覺、せ、ず、と、雖、其、信、仰、の、基、礎、を、解、剖、し、來、れ、ば、思、へ、ら、く、宇、宙、に、一、大、
 活、力、あ、り、萬、物、を、支、配、し、人、事、を、統、制、す、吾、人、の、起、居、動、作、は、一、に、此、活、力、の、
 發、現、な、ら、ざ、る、は、な、し、彼、は、常、に、正、を、扶、け、て、邪、を、亡、ぼ、す、至、公、至、平、毫、厘、も、

誤らずと、是を以て其身逆境に沈むときは忽然として此一念を喚起し
 來る喚起し來ると雖尙自らは是とするの我執あるを以て天を怨み人を
 怨む怨むと雖其之あるは則信せざるを得ざる也神なる信仰の深且大
 なるを見るべし
 然り而して人心の底面には更に微妙の活動あり之を救済を希ふの念
 とならず夜靜に人定まれる時孤燈明又滅の下徐るに自家の歴史を觀せよ
 諸塵緣境の役する所となりて靜慮反省する能はざるときは妄念紛起
 して須臾も休するなきに而かも一たび頭を回らし腦を轉じ來れば嗚
 呼何等の醜を罪業は積みて須彌をも低しとすれど善根功德は微塵に
 だも如かず善をさんどの志なきにあらざれども如何せん力微にして
 惡に克つ能はず纒に積みし切徳は忽ち崩れてもどの罪業のみ天にも
 滔らんとす身は是れ賽の河原に小石を築むる兒童の如きか大悲大慈
 の地藏尊に會はずんば何の時にか此罪業の淵を逃れ出つべきもし閻

の世ならざりせば必ずや至仁至愛の神あらん神ならでは吾を救ふ能
 はざる也と

是豈に一片の閑妄想ならんや人心の自然は實に神を求めて已まざる
 なり然るに今若し大悲大悲の天帝ありて人類を罪業誘惑の裡に救ひ
 出すなしとせん乎人類は永劫魔境に沈淪して浮む瀬なかるべし看よ
 其希望を擧げて亡滅に歸しなば宇宙の光景人生の行路嗚呼何たる慘
 憐ぞ思ふに神の存在を信するは人心本來具有の傾向と謂はざるべか
 らず

有神論者は以上の諸論據に由りて先づ神の宇宙の上に立てる所以を
 證し次に其性を定めて絶對無限不生不滅となし道義的進歩の監督者
 にして至正至公を旨とすと雖亦能く人類を罪業の淵より救ひ出す大
 慈大悲の化身なりとなす

請ふ是より聊か有神論の是非を批評すべし
 吾人は固より天地一貫の大原則あるを疑はず其天に在りては日月星
 辰の運轉を支配し地に在りては山河草木の存在を保維し人に在りて
 は日常道義の大綱を把握するを疑はず有神論者の列擧せる論據は吾
 人の經驗に相違せざる也然れども吾人は神即眞理を以て宇宙萬物の
 外に超絶卓立すとすの必要あるを知らず天地の大原則は即ち天地の
 大原則なり乾坤の中に充塞して毫厘も滲漏する所なし乾坤の上別に
 神人なる一巨靈ありてかの木偶を操縦する黒頭巾の如く萬物を生滅
 せしむるとは思はれず地球の轉ずるは自ら轉ずるなり草木の榮枯す
 るは自ら榮枯するなり本來遍滿ならざるなき一大原則は大は宇宙の
 外を籠羅し小は蕪刺の裡に密藏すかの神なるもの將た何處にか之を
 求むべき
 有神論の大患は宇宙萬物を以て磊々たる頑石鈍鐵の如く半點の生氣

なく暖氣なしとなすに在り是を以て天地以外別に靈妙の神力ありて
 之を動かすにあらざればこの活潑潑地の道理を會得すべからずされ
 ど其所謂る神なるものは神妙不可思議の力を何くに得たりとする乎
 若し萬物に生々の活力あるは萬物自ら具有するにあらずして必ずや
 外に之を付與するものありと云はれ神に玄妙の作用あるも亦神自ら
 之を具有するにあらずして他に付與者ありとなさざるべからず此の
 如くにして愈々進まば無窮を窮めて始めて休するを得べし故に吾人
 は特に神を説かずして宇宙の中に満足す
 神と宇宙と果して幾何の逕庭かある神は自ら其必要に由りて獨立獨
 存すと曰はれ宇宙も亦他力を待たずして存在するを得べし況んや吾
 人は宇宙に妙力ある所以を觀察すと雖未だ神に妙力あるを經驗せざ
 るにかいてをや
 有神論者が因果の理を以て神の存在を證せんとするは殆んど見戲に

似たり固より宇宙の一局部には因果の不斷相續するあれども之を全體の上より看來れば因もなく果もなし本來但只是の如きのみ若し因果なき所に強ひて因果を求めんとすれば無有を生ずと謂はざるべからず即ち神は空蕩の所より森羅たる萬象を拈出したりと謂はざるべからず是吾人が經驗の許さざる所沒理之より甚しきはなかるべし故に吾人は基督教の所謂有神論に對して無神論を主張す宇宙を超絶して獨立獨存せる天帝なしと曰ふ日月星辰の秩然として其序を誤らざるが如き草木禽獸の各其性に由りて發動するが如き皆是本來具有の性能に隨ひて然るなりたとひ神人實に在りと云ふも彼はた此宇宙を如何せんとする乎吾人は決して這箇の閑神野鬼を要せざる也有神論者の第一の根據とする所は斯の如くにして超自然的神人あるを證せず

第二に有神論者は諸行は無常なり有爲は轉變せずと云ふことなし故

に此世界の上には無爲の神人ありて而して其性は絶対無限ならざるべからずと曰ふ然れども吾人は世相の有爲轉變性なるを認めず又宇宙の相待偶對的なるを識らず固より其一局部よりして之を觀れば宇宙は相對なり故に無常なりと雖其全體を通觀すれば相對にして而かも絶対無常有限にして而かも常住無限なり相對を離れて絶対を求め有限を離れて無限を求めんとすれば絶対も亦相對となり無限も亦有限となり何となれば絶対は相對に對する絶対にして無限は有限に限られたる無限なるべければなり是豈に絶対無限を求めて却て相對有限の深坑に落在するものならずや

宇宙或は相對有限なりと曰ふべからん然れども其全體即ち無邊の空間と無窮の時間に涉りて之を見れば相對有限直に是れ絶対無限にあらずや花開き花落つるは相對なり無常なり然れども草木全體の生涯より見れば開落榮枯皆之をして絶対無限ならしむる所以也宇宙全體

の生命も亦然り其相對有限なる所以は即ち是れ絕對無限なる所以太
 始一團の星雲あり進化開發して今日の世界を現出すとせよ開發の今
 日よりして渾沌の太始を見ればかの一團の星雲は無常なるべし而し
 て又今日の世界の次第々々に瓦解氷消して日月星辰其光を失ふ時と
 ならば今日の世界も常住にあらず然れども一局部の見を去りて太陽
 系が渾沌より開發に開發より渾沌に一收一放一擒一縱する所以を全
 局より看來らば毫末の轉變なるものなきにあらずや
 故に有神論者が人心の絕對を求むるを見宇宙の一部の生滅するを見
 て超自然的神人の實在を説かんとするは察る近眼なりと謂ふべし人
 心の相對を離れて絕對を求めんとするは其見地全局に及ばざればな
 り宇宙一部分の觀察を以て其全體を推究せんとすれば也吾人は有神
 論の此點においても亦失敗なるを見る

第三に有神論者は神人の至公無私なるを説き第四に人情の自己より

も大なるものを恃まんとするを説く然れども吾人は前節において絶
 對の相對の裡に求むべく無限の有限の裡に覓むべきを論じたる如く
 宇宙間に至公至平の道理行はるゝを以て宇宙外に立てる神人の所爲
 となさず宇宙の組織自ら是の如くなる也と信す即ち吾人は道義的大
 原則の吾人が言行を支配するを見て益々宇宙の自ら神聖にして人生の
 自ら尊嚴なるを感得すと雖未だ超自然的神人を求めて此の如き性質
 を付與するの必要を見ざる也又人心の本來清淨にして惡なく善なき
 處に歴然として惡あり善あるを看得して益々人心の不可思議なるを驚
 嘆すと雖未だ神人の力を假りて此靈妙を感せんとするの必要を見ざ
 る也

蓋し有神論者は只善惡の關係的なるを見て而して關係的即絕對的な
 るを知らず善を執じ惡に拘はりて而して兩頭を截斷する能はず一時
 の否塞を見て而して全局の通達を解せず因果の避け難きを見て而し

て本來因果なきを悟らず我執我見を本尊として而して諸法無我なるを知らず罪業の應報を恐れて而して罪業の性既に空なるを解せず宇宙の思議すべきを知りて而して亦其思議すべからざるを知らず是を以て迷愈深く悟愈遠し遂に神人なるものを求めて其大慈大悲に依頼せんとす古人が一波纒に動きて萬波隨ふと曰へりし如く虛妄の一念忽然として生ずれば百千の邪見解蕪起紛出して底止する所を知らず亦悲しからずや

畢竟するに有神論は客觀的事實に由らずして主觀的感情に由れり感情は事の是非曲直を定むるものにあらず感情は盲動なり必ず智慧の指導によらんことを要す故に如上の論據は一も有神論を助けずして只其一片の閑妄想たるを暴白するに過ぎず

思ふに有神論者は未だ未開人民の妄想を脱却せざる也それ人智蒙昧の頃は風吹くを見て風伯ありと思ひ電光閃くを見て雷神ありと思ふ智

識漸く發達するに及んでやまた這般の妄想を喜ばずと雖尙神人ありて萬物の上に實在すとの思想を脱却する能はず之を頭上に頭を求むと曰ふ基督教は宇宙の不可思議を以て宇宙の不可思議となす能はず更に別に神人と曰へる不可思議の一物を憐ひ來りて不可思議をして愈不可思議ならしむ彼等固より人體的天主を信せざるべしされど人性的天主を信するに至りてはユダヤ民族の妄習の浸潤する深且長なりと謂ふべし

さらば吾人が神に對する概念は如何
上來有神論を辯駁したる處において吾人の位地如何は畧推測せらるべしと雖吾人は更に其所懐を記述するの可なるを見る劈頭にも述べたる如く吾人は神と云ふ語を用ふるを嫌ふ何となれば神と云へば直に基督教の所謂神人を連想するが故に或は讀者を惑はさんとするを恐

るればなり但吾人は從來の宗教的用語を變更するの不穩なるを知るが故に暫く神の語を眞理又は眞實の義にて用ひんと欲す讀者吾人の意を取りて語を取らざれ

吾人は基督教の所謂有神論者にあらずして無神論者なり無神論者にあらずして有神論者なり有神論者にあらずして無神論者よりも大なるもの也

無神論の基督教有神論に優るや明矣然れども只無神論だけにては消極的方面を知るに止まりて積極的方面は分明ならず故に吾人は次に有神論を主張す有神論は宇宙直に是神なり宇宙の外に神なく神の外に宇宙なしと云ふ有神論の合理なる所は神を以て超自然的實體となさす即ち宇宙の上に立てるものにあらずして宇宙と共に宇宙の裡に在りと云ふに在り然れども有神論も亦至れるものにあらず

有神論の弱點は世に罪惡災禍の存する所以を説明し得ざるに在り若

し一切を以て悉く神聖なりとせば悪なく邪なく凶なく又隨て正なく邪なく吉なきものならん道德も不道德も一齊に滅却せられて世は混沌なる器械的活力の運動するを見るのみならん若し力の發動ありとせば宇宙の存在は何の意義もなく何の差別もなく茫々蕩々たるものならん

然れども人生果して何の理想もなく何の目的もなき乎宇宙の進化人心の發達果して何の歸着もなく何の方針もなく何の意義もなき乎否否善あり惡あり正あり邪あり半あり滿あり健全あり不健全あり榮あり枯あり進化あり退化あり建立あり掃蕩あり天堂あり地獄あり佛あり魔あり雙々相照らし兩々相並ぶ是實に吾人が經驗の實相にあらずや

嘗て聞く昔時一神人あり惡魔を擒住して之を囹圄の裡に繋留したるに底事を宇宙の活動は突如として止り萬物は悉く魔酔したる如く

絲毫の活力なく一切冥々として何の差別をも呈せざりしと云ふ然り
 宇宙の活潑潑地にして須臾も休せざるは實に其相對的關係的なる所
 に在りて存す一たび其對偶を失はば渾一融合して存在の意義立地に
 泯滅せん宇宙果して凡神論者の言の如く一切善なりとせば退化は進
 化と共に善なるべく守舊は進取と共に是なるべく天理人事は宛然振
 子の前後左右に運動して而かも毫末の吉凶善惡なきと一般なるべし
 福固より喜ぶべし然れども禍ひを離れて得べくもあらず善固より希
 ふべし然れども惡を離れて得べくもあらず兩者相待つにあらざれば
 各其存在を保維し得ざる也一進一退一放一收是において宇宙の活面
 目を見るべし凡神論は理の一邊を見て其全豹をわする佛者の所謂差
 別なき平等は惡平等なるものにあらずや
 有神論に比せば凡神論の優れるや數等也只一步を進めざるが故に偏
 狹の見を脱却して圓滿自在の域に入る能はず如何か一步を進むる即

ち平等一邊の見地に安んぜず更に進んで差別の厯雜なる所以を究め
 ざるべからず無限の時間に涉り無邊の空間を窮めて宇宙の全體を達
 観すると同時に其變々化々して暫くも休せざる所以を尋覓せざるべ
 からず平等を説くも差別を離れず差別を説くも平等を離れず兩者を
 圓融して自在ならしむるにあらざれば宇宙を圓滿に説明し得たりと
 は云ひ難からん

吾人の見處に依れば宇宙全體の活動において一局部の退歩を惡と名
 づく即ち全宇宙が無窮の時間に涉りて一進一退するとき其進歩的局
 面を善となし其退歩的局面を惡となす故に惡は絶對的退歩又は破壊
 にあらずして一時變遷の途中止むを得ずして現はるゝ所の現象な
 り若しそれ宇宙全體を取りて之を點檢すれば破壊もなく建設もなし
 只一眞實が縁に觸れ化に應じて本來自然の活力を發現するを見るの
 み全局よりすれば吾人が一時破壊滅亡の觀をなすは是即ち新たに建

設し新に造作せんとすの準備に外ならず吾太陽系の破壊は禍なるべし
 されど是れ積極的建設に對して爾か言ふなり其更に新太陽系を運轉
 せしめんとするの準備なるを知らば却て是れ慶事ならずとせんや全
 局の活動は建設と破壊とを併せて必要とする也故に一局部には則ち
 善あり惡あり進あり退ありと雖全宇宙の命脈は兩者を通じて貫流す
 新に起らんと欲せば舊を捨てざるべからず前に進まんと欲せば後を
 顧るべからず
 果して然らんに神は進化にあらず而して退化の裡にあり退化にあ
 らず而して退化の裡にあり掃蕩にあらず而して掃蕩の裡にあり建立
 にあらず而して建立の裡にあり平等差別にあらず而して平等差別の
 裡にあり善惡是非にあらず而して善惡是非の裡にあり是之を神は隨
 處に光明を放つと曰ふ
 是の如くにして吾人は凡神論の一切善主義をとらず善惡是非吉凶禍

福は宇宙の常態にして人事の自然なりと云ふ而して吾人は又其善其
 惡其禍其福を以て直に神の面目なりと云ふ換言すれば吾人は平等の
 上に差別を説き差別の上に平等を説きて平等即是差別差別即是平等
 と云ふ故に神は進化のときは則ちあり退化の時は則ちあらずと謂ふ
 べからず神は無邊なり無窮なり時として相續せずと云ふことなく處
 として存在せずと云ふことなし是點より見れば吾人は有神論者也さ
 れど吾人の有神論の基教的有神論にあらずるは猶木偶の真人にあら
 ざるが如し
 吾人は如上の見地を以て凡神論よりも大なるもの一步を進めたるも
 のとなす然れども吾人は未だ之に命すべき適當の名稱を知らざるな
 り

吾人は總結して曰ふ宇宙直に是れ神の面目なり善にも神を見るべく

悪にも神を見るべし神は到る處に現はるれば也
 神を萬象萬化の外に求むるは未だ幼稚の思想を脱せざるもの誤謬之
 より甚しきはなし
 宇宙は感情を以て解釋すべからず感情の告ぐる所は智惠の説く所の
 如く眞なるべしと雖感情は事物を判斷する能はず神の存在は主觀的
 欲望のみにて證せられず
 吾人は基督教の所謂無神論即快樂主義の如く人類の義務を無視せず
 宇宙の尊嚴を蔑視せず人生の理想を没了せずと雖亦基督教の有神論を
 辯護する能はざる也

第四 信仰

信仰の宗教にかけるは猶柱礎の厦屋に於るが如く骨格の生物に於け
 るが如し更に之を切言すれば信仰即是宗教宗教即是信仰何となれば
 宗教の目的は人をして安身立命の地を得せしむるに在りて而して安
 身立命の地は信仰を外にして得べくもあらざればなり今それ深淵に
 臨み薄氷を踏めるものは戦々兢兢として安きこと能はず何となれば
 一步を誤れば千仞萬仞身は直に洪波激浪の中に沈淪して魚腹に葬ら
 るべければ也人は一日も這般危険の位地に立つ能はず信仰なくして
 安心を得ると云ふは薄氷の上深淵の邊に在りて泰然たらんとするも
 の基督曰く是故に凡て我この言を聽きて行ふものを磐の上に家を建
 てたる智者に譬へん雨降り洪水出で風吹きて其家を撞てども倒るゝ
 ことなし是れ磐を礎となしたればなりんて我この言を聽て行はざる
 ものを沙の上に家を建てたる愚者に譬へん雨降り洪水出で風吹きて

其家を撞つときは終に倒れて而かも其倒れ大なりと庶幾くは吾人も亦大磐石の上に大信仰を建て、大安心を得んことを、然れども吾人の所謂る信仰なるものは妄信迷信の謂にあらず獨斷默從の謂にあらず教會の信仰箇條を信じ古人の嘉言善法を信するも未だ以て吾人の所謂信仰となすに足らざる也教會の信仰箇條も方便なり古人の嘉言善法も方便なり是只所化の根機に隨ひて應病與藥したるものに過ぎず其人に在りては濟度の好方便なるべしと雖眞理其ものより見れば總て是閑言長語たるをまぬかれず吾人豈に這般沙上の樓閣に據りて生死の大事を決擇すべしとせんや古人は固より虚言妄語を吐きて後世を迷はさんとはせざりしならん釋迦の如き基督の如きは萬世の師表其一言一行を得ても衆の模範となるに足れり然れども吾人は尙釋迦の上基督の上に信仰の大伽藍を建つる能はず彼も人なり我も人なり吾人は寧ろ釋迦基督をして萬世の下尙人天の渴仰を受

けしめたる所以のものを信仰せんと欲す

諸法は轉變す何ものか能く常住なるべき唯それ常住ならず是を以て不生不滅を求むるに急なる人心は霎時も晏然たる能はざる也さらば生老病死をまぬかれざる人間を信仰したりとて吾人は何の時にか大休歇を得べきぞ圓悟禪師曰く「大丈夫漢已懸猶重んせす何に況んや他人の路布を取りて自己の胸襟となすをや」と吾人は他人の手より信仰を受領する猶物品を譲受するが如くなる能はず必ず當に自ら深く龍淵虎穴に入りて這箇の一物を奪劫し來らざるべからず吾人の所謂宗教なるものは空劫以前威音以後歴々孤明照らさざるなき道義の大原則を信仰するに在り此大原則を會得し信仰して而して其中に行住坐臥するに在り此大原則の動かんとする所に從ひて放身捨命毫厘の疑惑を挾まざるに在り吾人にして一たび此大信仰を得んか順逆の境に所して泰然として喜ぶ所なく憂ふる所なし身を放ちて鏝

湯熾炭の裡に入るも亦辭する所にあらず況んや正義の在る所碎身粉骨固より其期する所ならずんばあらず

然れども吾人は漠然として宇宙に道義の大原則ありと信仰するものにあらず基督が神ありと唱へたるが故に神必ずあるべしと信じ釋迦が彌陀の本願に縋がれば極樂往生すと教へたるが故に彌陀必ず信すべしと信ずるは寧ろ妄信の類にはあらざるか信仰にして單に宗教的情熱の結果に外ならざる時は勢盲目的信仰となりざるを得ず吾人は信仰と智慧とを並行せしめんと欲す之を譬ふるに信仰は猶ほ脚の如く智慧は猶ほ眼目の如し眼目なければ瞎驢脚にまかせて奔騰す豈に陥り坑に落ちずんば已ます而かも又脚なければ眼目如何に炬の如くならんも一步をも進むる能はず空しく天地を睥睨せんのみ智信に伴なはされば其弊や虚偽となり信智に隨はされば其弊や固陋となる兩者常に相待たんを要す

如何にして天地に大道理あるを信仰するか

天地の間に整々として一絲亂れざる大道理の存在するを信仰するは宗教の特有にあらず科學も常識も皆實に之れあるを信仰す之を妄信と云ふは汝の眼未だ明ならざればなり汝若し汝の此に實在するを覺らばかの大道理を感得せざらんと欲するも亦得べからず汝少しく回光返照して自ら内に顧みなば灼然として大道の日用行住坐臥の間に照りわたれるを覺知せん信仰は神佛と云へる外物を宇宙の外に求めて而して之に歸依するにあらず唯本來具有箇々圓成底の眞理を看破するに在るのみ信仰は建立にあらずして自然なり平地に波瀾を起すにあらずして春至れば百花开き秋來れば明月照すなり

もし信仰を以て安排計較して而して始めて得たるものとせば白雲千里大安心は決定して得らるべからず

看よ四時の循環する晝夜の交謝する草木の榮枯する吾人は自然に之

信

を信じて毫も疑はざるにあらずや是固より代々の經驗によりて本能となれるものならん然れども其經驗なるものは何に由りてしかく信せざるを得ざるか草木或は榮枯せざるを保せず四時或は循環せざるを保せず晝夜或は交謝せざるを保せず更に之をひろめて曰はく數學上の理法の如き吾人が智識中の最も確實なるものなれども二二或は五とならんも圖られず三角或は一直角をのみ有するに至らんも圖られず「イ」或は「イ」ならざるものに同じからんも圖られず然るに吾人は決定して此事あるべからざるを信ずるは何の故ぞ著衣喫飯の時咳唾掉臂の時一瞬時も如是の道理と相離れたることなきは猶影の形に隨ふが如く響の聲に應ずるが如くなるは何の故ぞ若し吾人にして本來天地の間人心の裡に一大道理の貫通するを信ずるの一念子を有するなくんば決して此の如くなる能はざる也さらば吾人の常識も亦一大信仰の上に立つものと言ふべし

仰

信

仰

次に科學も亦此信仰の上に建設せらるゝ所以を見んか世人動もすれば近代日新の科學を以て懷疑的傾向を有し一切の信仰に反對するものとなす大に錯り了れり吾人を以て之を見れば科學の基礎は實に信仰に在り科學は宇宙に一定不變の道理あるを先決して而る後吾人の經驗智識を歸納し續釋す若し此天地人心をして紛々たる亂麻の如く毫も端緒の求むべきなくんば科學は何の所に向つて手脚を着けんとするか既に科學なるものゝ存在する所以は多少か手脚を着け得たればにあらずや既に多少か手脚を着け得たりとせば知るべし天地人心決して茫々蕩々として歸着なきものにあらざるを故に科學にして互に抵觸せる二大理法を發見したりとせば其中孰れかは必ず事實を誤解せるものならざるべからず若し然らずとせば更に是よりも大なる理法の兩者を統一し調和するものあるを未だ發見せざるによる也宇宙の理法は到頭に歸す一に歸するが故に萬化萬象整々としてす

毫も亂れず老子曰く「天一を得て以て清し地一を得て以て寧し神一を得て以て靈なり谷一を以て盈つ萬物一を得て以て生ず侯王一を得て以て天下の貞をなす」と吾人又之に一句を加へて曰はん「科學一を得て以て全し」と

既に大道理ありと曰はゞ吾人は如何にして之を信仰すべきか

そは言ふまでもなく直下に此大道理と相應するに在りたとひ智識分別によりて大道理の存在を明らめ得たりとするも自ら直に之を覘捕するにあらざれば猶ほ籬を隔て、美人を見るの感あらん大信仰は決して分別情解の裡より流出し來るものにあらざ故に釋迦基督の嘉言善法と雖一たび觀面に這道理に相見したる後にあらざれば却て粘着縛着汝が心をして自由あらしめざるべし此件に關しては「宗教第一章

に畧説明したれば就て看よ

序に吾人は世人が信仰と理智とを以て相矛盾するものと思へるは誤なる所以を辯せんと欲すれども向きに「宗教」及「宗教と科學にて科學と宗教とを併論するの際此事にも論及したるを以て今別に此に之を説くの要なし但或る宗教は宇宙の外に超絶したる神人を信仰するが故に往々科學と衝突するを致すとあり加之此妄信黙從をなすものは名に拘はり形に惑はされて恣に自由を得ず纔に其形骸を改むれば直に之を指して異端となし外道となし甚しきは敗徳不倫なりとなす一邊を知りて全局を知らず自家の妄信を固執して圓融無碍通達自在の妙境に遊ぶ能はざるものは常に頑迷執拗の人となるをまぬかれず是の如きは到底科學と兩立する能はざる也

故に信仰に進歩と保守との二類あるを知るべし智を以て照し情を以て進むものは物と推移して些子の凝滯を存せず騰々任運にして隨處

に解脱せずと云ふことなし佛境にも入るべく魔境にも入るべし八面玲瓏圓轉滑脱珠の盤を走るが如きか此の如きは名相形體に牽惹せられず其精髓を把握して自家藥籠中のものとなす之を進歩的信仰と名づくるも可ならんか而してかの退嬰保守の徒は大に之に反す只管他方に依憑して自己を信せず文字に束縛せられて精神を悟らず是故に到る所に矛盾衝突す唯自家の所信を所信として他を謗讟せざれば則ち恕すべし其妄信を唯一の眞實として他を邪法視するに至りては其宗教の徳を傷つくる多しと云ふべし龍樹菩薩曰く「自法に愛染するが故に他人の法を毀譽せば持戒の人と雖地獄の苦をまぬかれず」と世の學者往々宗教を自して妄信となすは唯這般の宗教家を觀察するに過ぎざればなり從來の弊習を把りて宗教の眞實を没却せんとするは眞理を愛するものゝ爲すべからざる所學者たるもの豈に自家の臆測に偏執して他の眞をなすをわするべけんや

第五 儀式禮拜祈禱

心は心として存在する能はず必ずや物を假りて現はるゝが如く又神は神として存在する能はず必ずや宇宙を假りて動くが如く人心は抽象的形而上的の道理を以て満足する能はず必ず之を具體化し形而下化せずんば止まざる也而してこの情は人智發達の度愈低うして愈高し蠻民は神を以て人體人性を有する生物となし無教育者は靈魂を以て死後尙蓬髮沒脚の人間として存在するものとなす蓋し彼等人心自然の要求に逼られて生命の不生不滅なると眞理の宇宙に充塞することを知覺すと雖之を抽象的形而上的の道理となす能はず感情に驅られて不知不識宇宙の外に人性人體の神を求め心意の外に靈魂の存在を認めんとす道理は智慧を満足すれども感情を安穩ならしむる能はず抽象的眞理は大智大慧にして始めて會得すべし小智小見は一切を具體化して其感情を慰せんとす故に神人と曰ひ幽靈と曰ふ皆宗教上の記

號に過ぎざる也而して宗教の儀式を要する所亦此に存す
 或る意義にて曰へば宗教は哲學の應用也其理の幽深にして其道の高
 遠なる愚者の容易に解し得る所にあらず固より苟も人心あるものは
 宗教の事實たるを感悟し得べしと雖智慧分別にして充分に發達せざ
 れば自ら覺知したる真理を抽象的即ち形而上的に詮表する能はず遂
 に一種の記號を求めて其情を満足せんとす是を以て一見噴飯すべき
 儀式も仔細に看來れば一大真理の幻影にあらざるなきは明眼の士の
 能く知る所ならん
 それ智は抽象的也情は具體的也智は形象を離れて高く飛ばんとし情
 は形象を求めて其中に隠る智は煙の如し飄々として天に上る情は水
 の如し浸潤せずと云ふとなし而して宗教は情感の懷中に眠るものな
 り故に宗教は一切を記號化せんとす猛烈の徳を現はすには不動尊を
 以てし慈仁の徳を示すには地藏尊を以てし福德の性を表はすには大

黒天を以てし美の神には辨財天あり力の神には摩利支天あり是は僅
 に當時我國における偶像の意義に過ぎざれども希臘にも羅馬にも印
 度にも皆相應の神怪譚なるもの之あるは讀者の知る所ならん
 故に宗教は智慧の理論のみに由りて満足すべからず亦當に感情を發
 表すべき儀式あらんを要す今それ死生は天なり死せるものは溘焉と
 して逝く復た追ふべくもあらず之を追懷する何の益かあらん然れど
 も情は熱火なり冷々たる智水の能く消滅する所にあらず是故に吾人
 は死者のために或は石碑を建て或は肖像を造り或は遺物を崇め或は
 香花を供し或は死者の好みたる食物を捧げなどして以て其靈を弔す
 とす是れ亦以て儀式の自然に必要なるを證するものにあらずや然
 るに今若し人生を以て唯智慧のみを發達すべき處となさんか猶は機
 械の膏を缺きたるが如く憂々乎として相軋し相櫟す圓轉滑脱の妙を
 れ竟に解すべからざるに至らん固より人智發達するに従ひて迷信妄

情は益薄らくなるべしされど真情解信を適當に表示すべき宗教的儀式は萬古に渉るも決して湮滅せざるならん
 儀式は宗教的思想を形而下化したる也抽象的眞理を具體的に表現したる也赤條々の眞理をして峨冠を戴き禮服を着けしめたる也眞理は骨髓なり儀式は皮肉也眞理は智の化身也儀式は情の形骸なり眞理は本體なり儀式は記號なり眞理をはなれて儀式を求めんとせば蒸氣なき機關の如く呼吸なき人體の如しはた何の意義かあらん儀式は當に其内容せる意義を恰好に表顯するものならざるべからず苟も雜駁不純の分子を包含せば嚴肅なるべき法式も適嘲笑の好材料となるに足らん乎

元來宗教の求むる所は其意の清淨なるに在り其情の純潔なるに在り必ずしも精進潔齋するを須ひず必ずしも三拜九拜するを須ひず佛像を燒きて暖を取るも佛名を懷鼻禪に書して之を着くも其心は則佛

祖の心其行は則菩薩の行儀文字に拘執するは近眼者流の所爲に過ぎざるべし而かも此の如しと雖禮は玉帛にあらざれば彰られず樂は鐘鼓にあらざれば傳はらず儀相禮典に執着するは却て其眞意を誤る所になりと雖其儀相禮典を捨て、其眞意をのみ求めんとするも亦穩當なりとは謂ふべからず

果して然らんに宗教は當に儀式の儀式たる所以を知りて其儀式の拘牽する所とならず時に隨ひ處に應じて自由に取捨せざるべからず大凡儀式は其時其處の人情風俗に相應して起れるものなれば西洋の式を以て直に日本に應用すべくもあらず神代の禮を以て直に今日に適用すべくもあらず故に印度佛教の儀式は支那に入りて一變し日本に入りて再變したり其時其處の人情風俗に應じて一種の意義を有し以て優に宗教的思想を代表し得たるものも時勢の移つるに従ひて人情も亦改まり國土を異にするに従ひて風俗も亦變るときは先きの肅

整も今は一場の笑柄となるべく先きの恭敬禮拜も今は空文虚禮となるに至らざるを得ず是素と自然の理なり然れども先きの嚴肅なる儀式の今は虚禮となりたるが故に全然儀式を廢せよと云ふが如きは是物の本末を顛倒したるものと謂ふべし儀式は則ち變移すべしと云へども儀式を要する所以に至りては則ち今古一なり故に宗教の儀式における離せず執せざるを以て最要となす

一を知りて二を知らざるものは宗教を以て儀式の外一物もなしと想像し之を目して迷信妄想となせり而して彼等自らは物質を以て宇宙となし快樂を以て人生の目的となし毫も人間の威嚴宗教の真相を會得せず之を阿闍提と云ふ病醫育に入る良醫も其救治し難きを慨くするべし

又一類あり儀式を以て全然無用なりとなし思へらく心だに誠の道に稱ひなば何を必ずしも儀相を取らんと是亦思はざるの甚しきもの看

よ彼等が胸に勳章を懸くるは何のためぞ金光燦爛たる大禮服なるものを着くるは何の爲ぞ正何位從何位との位階を名刺に書き添ふるは何のためぞ學校の卒業に證書を受取るは何のためぞ婚姻の筵に三々九度の杯を取り交すは何のためぞ亡者の弔ひに或は黒服或は素服を着くるは何のためぞ畢竟觀じ來れば世間何ものか儀式ならざる其身は儀式に由りて生れ儀式に由りて長じ儀式に由りて死しながら尙儀式を要せずと云ふ是の如くにして儀式を要せずせば汝は亦空氣を要せず水を要せざるべし既に空氣を呼吸し水を飲用して而して獨り宗教の儀式を要せずと叫ぶ乎之を盲目論者と云ふ

儀式は此の如くにして必要なりと雖亦無用の儀式なきにあらず無用の儀式とは何を禮拜と祈禱と是也禮拜と祈禱とは宗教的意義を發揚せんとする儀式にあらずして寧ろ自利的精神の宗教化したるものと

謂ふべし吾人は之を辯護する能はざる也
 されど禮拜に二種類あり一を報恩謝徳の禮拜となし一を希求願望の
 禮拜となす吾人は第一種の禮拜を斥けずして専ら第二種を排斥せん
 と欲す

何故に報恩謝徳底を取る乎

蓋し教祖が衆生のために大慈悲を垂れ自ら困苦窮迫の境に沈み一身
 を犠牲にして成佛の法を宣傳したる其恩徳は海山よりも深且高なり
 と謂はざるべからず今日吾人が救済の途を得て安身立命の田地を踏
 着するは一に教祖の指示に由りたれば也行住坐臥咳唾掉臂一々天眞
 佛の活面目を現出する所以を悟了したるの愉絶快絶なるを思ひ翻つ
 て教祖が猷身的慈悲の如何に廣大無邊なるかを思ひ起すときは報恩
 謝徳の心油然として禁する能はず不知不識教祖の面前に低頭平身し
 て其感謝の意を表す是人情の自ら然る所也其肖像たると其遺物たる

とを問はず之を見て忽地に其人を連想し而して其連想の激甚なるや
 其肖像其遺物を取りて直に其人と同一視するに至る情熾んるとき
 は自ら此の如し此種の禮拜之を報恩謝徳底と曰ふ其自然なるは何人
 も首肯する所ならん

吾人は寧ろ第二種即希求的禮拜の没理なるを訶責せんと欲す希求的
 禮拜とは何を曰く教祖の肖像遺物又は理想上の徳性を代表したる偶
 像を以て萬能力を有するものとなし之に向つて私欲の満足を希ふ即
 是なり太古蒙昧の野蠻人が人體人性的の神靈の怒に觸れざらんがため
 又は其歡心を買はんがため神樂を奏し犠牲を供するが如く彼等は偶
 像に對し叩頭禮拜して其威靈彼等は實に之れ有りと信せりの加護を
 蒙り由りて以て或は壽命の永からんを求め或は家産の饒ならんを願
 ひ或ひは來世の福德極樂往生を希ふ執れにしても彼等は教祖の肖像
 遺物或は人類が理想上の徳性を表顯したる具象的物體即ち地藏尊章

馱天麻利支天等の影像を以て實に人類以上の力あるものと思惟せる
也是豈に偶像教の本色を暴白するものにあらずや吾人は決して這般
の禮拜に與する能はざる也

由是觀之兩種の禮拜其懸隔天地も管ならずと雖其外形に現はるゝ所
即ち頭を垂れ膝を屈して拜伏するの狀は兩者相同じきが故に皮相論
者は直に報恩的禮拜を以て希求的禮拜となして大に之を非難せりか
の基督教徒が貴顯の肖像に對して敬禮を施さゞりしが如きは此種の錯
誤に出でたるなり然れども基督教徒も亦或る意義における偶像に向つ
て禮拜するを忌まず即ち彼等の神を呼ぶや必ず天に在すと曰ふもし
神にして在さざる所なしとせば何が故に天と限りたる乎又彼等の祈
禱を捧げんとするや毎に或は眼を天に注ぐか或は手を高きに擧げざ
ることなし是果して何の意義をや神にして一切處に實在せりと曰は
ば汝の心にも在るべく汝の眼前背後にも在るべしさらば何が故に強

ひて天を指さんとする乎蓋し虚空の如く茫々たるものにては手脚の
着くべき所なく感情の向ふべき所なきが故に一定の所一定の物を取
るにあらざれば其心何となく満足する能はざるなり是亦佛者の報恩
謝德的禮拜に異ならざるべき乎

吾人が次に務めて排斥すべきは希求的禮拜の一種とも曰ふべき祈禱
呪咀禁厭神符の類是也是事の虛妄にして沒理沒義なるは今更喋々を
要せずと雖現今我國の中等社會上等社會にすら尙這般奇怪の説を信
ずるものあり又佛教の或宗派に在りては専ら這般の行を務むるを以
て本色とするものあるに由り聊か之を辯すべし

吾人の所謂る宗教は徹頭徹尾合理的ならんことを期するもの也故に
かの好んで神秘奇怪の魔力あるを信するものと衝突す而して此祈禱
なるものは實に這箇の神怪力即ち宇宙の原則を意に任せて變更し得

る神怪力の存在を先決するもの也既に之を先決す是を以て此神怪力を動して自家の快樂を計らんとするや一切の方便盡くさすと云ふことなし祈禱は實に自利主義也自家の意志によりて天地不可動の大原則を變改せんとする也其大膽粗心寧ろ驚くべきにあらずや
 若し祈禱を捧げ禁呪を行ひ神符を持するに由りて長壽を得健康を得福利を得成功を得其他一切の物質的利益を得べしとせば地球運轉の中止を祈り河水の逆流を祈り太陽の常照を祈るも亦當に靈驗あるべき理に非ずや病魔に犯さるゝはつらしされど不攝生の結果は自ら然らざるを得ず戰敗をとるはつらしされど計策未だ全からざるものは自ら敗れざるを得ず而して今祈禱に由りて全快全勝を得たらんには因果の法則は立地に蹂躪せらる吾人は一刻半時も悠々として起居すべからざるに至らん何となれば晝夜の交迭も何人かの祈禱によりて忽ち逆行するあらんも圖られざれば也愚者も此理を會得せば却て祈

禱の實行せられざらんを祈禱せずんばあらじ
 自利主義の祈禱は其自利と云ふ一點に在りても神人の加護を受くべきにあらず況んや妄誕無稽の説をなして天理を動かさんとするに於いてをや少しく思慮あるものは直に此種祈禱の沒義理なるを知り得るならんされど尙人を惑はすべき一種の祈禱有り利他主義の祈禱と曰ふ例へば衆人のために平和を望むが如き早魃のときに大雨を祈るが如き戦争のときに味方の勝利を祈るが如き智徳の圓滿を祈るが如き總て自利々他のために祈禱するを利他主義と名づく是等は自利一邊の快樂を目的とするにあらず衆と共に其徳に浴せんとするものなるが故に世人或は天地鬼神も之に感應して其祈禱に聽き給ふならんと思へり蓋し此種の思想は元來人間の利他的即ち無我なるを證す何となれば彼等祈禱者は天地の大道理の自利主義にあらずして利他主義なるを冥然覺知し而して其覺知の強固なる利他的祈禱は必ず鬼神

を感動し得べしと確信すれば也

然り而して利他主義の祈禱にも二様あり一を物質的、利益を祈るもの、一を心靈的、進歩を祈るものとなす他人のため、に物質的、幸福を祈るの妄なるは猶ほ自家のためにするが如したとひ人類全體のためなりと云ふも萬有の間に貫通せる因果の道理は人間の意志を以て左右すべきにあらざる否人間の意志は却て此因果の法に順適せんを要す大旱に雲霓を望むは人情なり殊に農家に在りては農作物の之がために利害を感ずるもの非常ならんされど晴には晴の原因あり陰には陰の原因あり此原因にして成立するにあらざれば或は晴或は陰如何んぞ之あるを得んや而して此原因は人間の轉變的意志によりて成立するものにあらざれば斷食精進して雨伯雷神の加護を祈るもはた何の利益かあるべき又戦争の際の如き各自に味方の勝利を祈るも亦迷妄の情より出づ我も勝利を祈り敵も勝利を祈らば天帝それ孰れを助けんと

する乎天帝は萬能力を有す自然の法を破壊して敵にも我にも勝利を授けん乎或は曰ふ天帝は正に與すとされど我も正と信じ彼も正と信じなば如何凡そ争の生ずるは皆自ら是とすればにあらざるや又曰ふ正義は主觀的にあらざる客觀的なり天帝の眼中に正義と映するものにあらずれば吾人自ら爾か思ふも天帝は必ずしも助けずと果して然る乎然らば何ぞ必ずしも祈禱を須ひん任運に天命をして其在る處に在らしめば勝利は何れにか歸する所あらん畢竟祈禱は蛇を畫きて足を添ふるの類也

豈に管之れのみならんや祈禱其物は根底より没理的なり何ぞや前にも述べたる如く祈禱は先づ自然法以外に自然法を左右する人性的天帝の存在を假定し而して其天帝を以て人意に聽従するものと想像すれば也さらば如何なる種類の祈禱と雖苟も祈禱と云はゞ悉く是れ妄想の産物なりと謂はざるべからず

されど第二種の利他的祈禱即ち心靈的發達の障礙なからんを祈るは深高なる意義を有するが如し固より其意義の依りて現れたる形式即ち祈禱は妄信たるを免かれずと雖仔細に其意義を看來れば人性の奥秘を拂開するに似たり即ち人類には無限大に達せんとする一種の理想あるを知る是なり智慧に味きものは此理想に逼られて不知不識智徳圓滿の域に進まんとするの熱情あれども其理想たるを知覺せず又其如何にして次第々々に實行せらるべきかを知らず是を以て天帝の加護に由り佛陀の冥助に由り之を自己一代の間に成就せんとす彼等尙未だ宇宙的生活を悟らざるを以て智徳其物の利他的なるにも拘はらず之を個人的存在にて制限するに至る然れども這般の祈禱たるや實地の上に在りては大なる功徳を生ずるならん妄想迷信と雖之を善事に向くるときは修身進徳の助となるべければなり

人類の上に平和の來らんことを祈るが如きは實に人類の理想なりと

謂ふべし而して吾人は自ら此理想を實行するに足るべき性力を有す

他時異日遂に平和の地上に實行せらるべきは吾人の確信する所然れども吾人は敢て他の感應を願はず他の加護を求めず但道義の大原則に遵ひ寸を進め尺を進めて遂に無窮をきはめんと欲す此の如くに祈禱を解釋せば祈禱大に奨励せざるべからず吾人は只之に附帶せる雲霧が日光の本體を蔽遮せんを恐る金屑すら眼中に入れば翳となる況や其金屑ならざるものにおいてをや

之を要するに祈禱は希望の最高度に發現して之に迷信を加味したるものと謂ふべし自利々他の希望は吾人類全體の理想なれば如何に高度に發揚するも毫も嫌ふ所にあらず只迷信妄想の之に加はりて嘲笑の媒となるなからんを欲するのみ希望如何に切且急なるも自ら進んで自ら行ふにあらざれば徒に妄斷迷執の役する所となり了らん乎吾人は世人の真相と外相とを同一視せざらんを望むや切なり

然るに我邦近來の精神界は一方に在りては冷然白眼にして世を觀るものあると同時に他方にありては益迷執の深淵に沈まんとするものあり固より下根劣機の徒は真正なる宗教家の大慈悲大方便に由りて救はざるべからずと雖上根逸才の輩は自省靜慮の功を積みて親しく大解脱の田地に到らんを要す若し此の如くにして兩者各其中庸を失ひて一は無貪著の極に上り一は迷信の極に下らば宗教の面目永く亡びて人類の發達遂に沮まんも圖られず是豈に恐るべき現象にあらずや吾人が本書を編述するの意亦實に之を救はんとするに在るなり

第六 教祖

或は教祖と曰ひ或は開山と曰ひ或は祖師と曰ひ或は教主と曰ひ或は豫言者と曰ふ皆一派の宗教を組織したる人物の尊稱也馬哈鳴德は回教の開山なり耶蘇は基督教の祖師なり摩西は猶太教の豫言者なりアスマーは波斯西教の教祖なり釋迦牟尼は佛教の教主なり而して吾人は本章に於て是等の諸教祖が所謂宗教即ち真理に對して如何なる關係を有するかを見んと欲す

吾人は佛教と云はず基督教と云はず回教と云はず但只宗教と云ふ何となれば吾人が本書を述ぶるは或る一宗の教理を説かんとするにあらずして只宗教全體の道理を明にせんとするにあれば也吾人は既に前章において宗教の何ものなるかを明め得たりと信するが故に是より各宗の教祖がこの宗教に對しては如何なる位地に立ち如何なる價値を有するかを説くべし頑迷固陋の見を去りて直に宗教の全體を現露

せしめ是に由りて教祖は如何なる職務を果すべきものなるかを述べし
 吾人は教祖の宗教における位地を以て第二段となす蓋し宗教の無上
 尊とする所は真理に在り真理の在る處は順境にも入るべく逆境にも
 入るべし佛教も是なり基督教も是なり儒教も是なり神人も是なり惡魔
 も是なり何の嫌ふ底の法あらんや故に基督教徒と雖誠に真理の何たる
 を會得せるものは必ずしも基督を以て神の唯一なる愛子とはなさ
 るべく佛教の中にも真理の光燦爛たるを認め得るならん又佛教徒と
 雖眞に佛陀(眞理)の光明に攝取せられたるものは必ずしも佛教にのみ
 執着して他の美に盲なることなく基督教にも回教にも幾多の金言ある
 を看取するに吝ならざるべし彼等は宗教の本旨は大慈大悲にあるを
 知り又直下に眞理を覘捕し來りて自家藥籠中のものとなすに在るを
 知り是を以て教祖の名に拘泥して無繩自縛の愚をなすを欲せず佛

陀も基督も畢竟同一眞理海中の大小波瀾を揚げたるものなるに其波
 瀾のみを是れ知りて其同一鹹味なるを忘れなば指を見て月を見ざる
 の痴人に類せざらんや明眼の士は決して這般迂拙の事をなさざるべ
 し
 眞理は宗教の全體なり宗教は眞理と共に存し眞理と共に動く眞理な
 ければ宗教一日も存すべからず教祖に至りては則ち然らず固より之
 れあるは之れなきに優ると雖宗教は必ずしも教祖を要せざる也即ち
 教祖なきも宗教は依然として存すべく眞理は依然として感すべし何
 ぞや眞理なるものは他の力を待ちて而して始めて成立するものにあ
 らず本來如々として基督出世以前釋迦成道以前に存す兩教祖は只之
 を知覺して諸方に宣傳したるのみ宣傳したりと雖眞理の眞理たる所以
 を覺知するは吾人自ら覺知する也教祖の手を煩はすにあらざれば之
 を眞理なりと認知し得すと云ふの道理あらんや猶數學の原則を知得

するが如し二二が四どの敷理は人の教を待つて而る後會得するにあらず吾人實に自らしか信せざるを得ざるが故に眞理なるなり故に教祖の價値は吾人のために嚮導となりたるに在り嚮導の功實に大なり嚮導なくんば吾人或は黒闇裡の人となり然れども嚮導者の眞理其物にあらざる所以を悟らば兩者の關係に先後本末あるを認めざるべからず

又之を道理と文字とに比すべし文字なければ如何に高妙なる道理も之を表詮して他に傳ふるの術なからん従つて人智の進歩も或は阻害せられん乎吾人は大に文字の効果を感じ謝す然れども吾人の要する所は文字に在らずして道理に在り道理をだに會得せば暫く文字を忘るるも亦妨けず蓋し文字は第一義にして道理の本體にあらざれば也故に吾人は宗教の上に在りても亦眞理を首となさざるべからず或る意義にて言へば教祖を以て神の化身眞理の權現となす亦可なる

べし然れども此場合に在りては記號と眞實とを同一視せざらんを要す即ち神の化身眞理の權現と曰ふを如字的に解釋するときは文字を執して直に道理其ものとなすの混雜に陥らざるを得ず基督教徒が基督を以て天の愛子なりと信じ聖書を以て神の福音なりと信するが如きは正に此混雜に入りたるもの是くの如くにして若し一切の記號を以て直に眞實其ものなりと云はば詩人が其豊富なる想像庫より取り出したる空想を以て悉く現實なりとなすに至らん是に於て乎舊約聖書の創世記も如字的に解釋すべく希臘羅馬の古代神怪譚も其まゝにて眞實なりとせざるべからず古人が直覺したる眞理を詩人的想像に由りて之に形象を與へ之に住處を與へ之に歴史を與へて具體的存在となしたるものを文字の如くに解釋すとせば虚誕迷妄其底止する所を知らず

吾人は此點において基督教徒の一派が尙迷霧の裡に彷徨するを嘆く日

本基督教徒には是弊少からん吾人は重に歐米の基督教徒を指す彼等以爲らく「基督教は天啓に出づ而して佛教は自然教なり敵を愛せよ」と曰へる金言の如きは基督教の専有に係るたどひ佛教に此語あるも基督教の神託と其威嚴を均しくするものにあらずと吾人は大に其狹隘なるに喫驚せざるを得ず又其我執の妄念に束縛せられて自由なる能はざるを慙まざるを得ず試に思へ真理は人天の私有し得る所なる乎又思へ真理は基督の唱へたるが故に真理にして佛陀の所説なるが故に真理ならざるを得る乎真理は天下の公道なり吾も蹈むべく人も蹈むべし豈に其人を異にするによりて其價を二三にするものならんや

由來基督教徒の一部は頗る頑迷執拗なり神なるものを宇宙の外に求め基督を以て神の子となすが故に主我の念極めて大に苟も彼等の所謂神人を攻撃し基督を以て人の子なりと曰へば直に吾を以て無神論者即ち快樂主義を唱へ不義不倫を行ふものとなす彼等の教祖は決して

這般の迷信を教へざりしに代を經るに従ひて獨斷仰信の風愈々興起して遂に彼等をして瞋恚頑迷の化身とならしむるに至れり痛哉

偏固頑迷の徒は宗教の大體に通せず自宗を以て神の直命に成れるものとなし教祖を以て神の化身真理の權現なりと信するが故に他宗を以て悉く異端外道となして勉めて之を排斥す自家の教祖と同一言行をなせるものありとも毫も之を容るゝの餘裕なし思へらく「苟しくも吾教祖を謗り吾教理を論ずるものは悉く之を殲滅せざるべからず」と是を以て宗教史の紙上は血痕斑々として千世遂に拭ふべからざるの汚點を止めたりそれ宗教の本旨とする所は大慈大悲を以て敵と味方とを問はず順縁と逆縁とを論せず一切の衆生を濟度して普く涅槃の彼岸に到らんとするに在る也然るに是之をわすれて互に擠排し遂に逐斥す宗教と教祖との關係を知らざるの弊も亦甚しと謂ふべし

教祖の職務は人のために榛莽荆棘を伐りて成佛の途を拓くに在り、せば吾人は孰れの教祖を以て嚮導となすべき乎、基督も眞理の嚮導者は絶てて優劣なかるべき乎

吾人の意見を正直に陳述すれば、基督教の長處は佛教の短處、佛教の長處は基督教の短處なり、優劣は即ち之れなしと雖、特色は則ち之れ有り、基督教は感情の激烈なるを以て特色となし、佛教は智見の高邁なるを以て特色となす、基督教は火の如く炎々として燃ゆ、佛教は山の如く魏々として峙つ、智見高邁の弊は超然自ら重んずるの風を生じ、感情横逸の弊は盲信妄斷となる故に、佛教には厭世觀をなすもの多く、基督教には愛世觀(樂天)と異なりをなすもの少なからず、固より佛教に在りても釋迦其人は大智見を具有すると共に大慈悲を示したるの事跡昭々たれども、其經典は寧ろ哲學的分子を含むこと多きが如し、是を以て佛教は釋迦を去

る次第に遠くして次第に哲理的方面に傾きたり、即ち馬鳴龍樹に至りて益、大乘深奥の教説を擧揚し、次ぎて支那に入るに及びて法華華嚴の如き廣大無邊の玄理を談ずるもの益、夥しくなりたり、然るに基督は之に反して深奥なる哲理を説かず、唯直覺的に眞理を述べたるを以て世を經るに従ひて獨斷的教弊を生じ、寺院の所説を以て強迫的に信仰せしむるの傾を生じたり、他力によりて救済を得んとするときは自ら仰信、嚮從を本旨となし、祖師の信仰箇條を鐵壁の如くに思ひなさいるを得ざるものある也、佛教にても支那日本にて發達したる淨土宗、眞宗などの如き實に此弊あるを見るべし、とに角、佛教は印度哲學の勃興の時代に崛起したるを以て自ら智恵を重んずるの風あり、而して基督教は猶太教の跡を襲ふて興起したるを以て自ら感情を先にするの風あり、之を兩教の特點となす

然れども若し釋迦と基督とを以て其位地、其時代を更へて生れ出でた

り、とせば釋迦も亦基督の爲せし如く感情を主としたるなるべく基督も亦釋迦の如く哲理を基として宗教を建立したりしならん故に釋迦は印度の基督と謂ふべく基督はユダヤの釋迦と謂ふべし兩教祖の價値必ずしも軒輊するを須ひず

如何に超邁卓絶なる人物と雖其時代の精神以外に出で、超然獨立する能はず否獨立するも何の益なき也しかも聖人をして千歳の下尙生氣あらしむる所以は唯一片の至誠に在るのみ這至誠其時其處の事情に搖かされ猛然として起ちて救世の大慈教を唱道す思ふに其始めて起つや必ずしも不朽を期せざりしならん少なくとも不朽を自覺せざりしならん何ぞや彼實に不朽其もの、化身となりて或は説法し或は行爲すればなり其身既に不朽其心既に不朽自ら不朽を期せざるも千古萬古相傳へて斷滅するなきは必然の理也一片の至誠は此の如くにして永劫斷續の相を絶すと雖時勢の變遷國土の改移に由りて其形體

は多少の面目を變せざるを得ず基督教にも佛教にも許多の分派を生じて却て互に軋轢するに至れるは蓋し之がため也

故に吾人は教祖の精神を取りて必ずしも其行履を蹈まざる所謂丈夫自ら衝天の氣あり如來の行處に向つて行かざるもの宗教は務めて此不變の精神を感得せんを要す若し人あり基督を以て宗教の嚮導者となさんと欲せば基督教に入るべし佛陀を以て真理の媒酌者となさんと欲せば佛教に入るべし要は直に教祖の眞意を看破して教會寺院の奴隸とならず又直に眞理の王城に進入して途程街頭に迷はざるに在るのみ而して一たび眞理に到達し得たらんには必ずしも基督教に執着し佛教に貪着せず基督に出入して各其精醇を咀嚼す佛者は之を應病與藥と云ふ蓋し其病根を異にすれば従つて投劑の法を同うする能はず萬根湯一味を以て萬病に應せんとす萬病何の時にか癒ゆるとあらんや故に其人の根機に相應して頓漸半滿各其法を異にすとも自然の數也

宗旨に深淺の差別あるは勿論なるべしと雖優劣に至りては則ちなし各其機に相應し其病に投合すとせば彼も是なり此も是なり佛教も尊ぶべし基督も尊ぶべしさらば何が故に自法にのみ愛樂して他を誹謗するが如きことをなさんや

然れども我國今日の状態を以て之を見れば歐米の基督教を直に取りて我邦に移植せんとす或は衝突をまぬかれざるべし又封建時代の佛教を以て其まゝ今日の我邦に繼續せしめんとす亦或は抵觸を生ずるあらん宗教家は大概這般の實地問題に關して多少の意見あらん本書は今之を論せず

第七 人

吾人は今此にて人類を生物學の上より研究して其自然界における地位を定めんとするにあらず又心理學の上より研究して如何なる心力を有するかを知らんとするにあらず吾人は宗教的方面より人類を観察して其自ら宗教的なるを明め次に人類は無限に發達すべきものなるを説かんと欲す

何ぞか宗教的と云ふ個人思想を脱却して宇宙的ならんとするの一念子生滅の相を遠離して不生不滅に到らんとするの一念子道義の大原則を捕捉して身を其上に安せんとするの一念子是之を宗教的情感と謂ふ時間と空間と因果とに繫縛せられて此に六尺の身幹を有し五十年の歲月に生き善惡應報に輪廻すと雖人間は常に此桎梏を脱却して自由自在ならんとするの願望あり彼等は這箇の中にありて鐵索に縛せられたるの思をなし我執の妄念より生ずる情火のため其身を焚

かるゝの感をなす是を以て偶々無我の神境に冥合して無功徳の功徳をなすことあれば此心何となく欣々として不生不滅の靈氣を吞吐したるが如くに想ふことあり蓋し人類は自ら宇宙的ならんとするなり熟々按ずるに宗教的思想の最も高度に現はれて自覺に上り來るは逆境に處するるとき即ち愛せるものを失ひたるるとき(一)自ら善と思へるとの行はれずして却て窮迫に陥るとき(二)自ら一時の情に任せて残酷激烈の所行をなしたる後意平に心靜まれるとき(三)非常の患難交々到來して其生命を危うするるとき(四)に在り是等の場合を臨む時は人心蘊奥の所に潛める一大信仰は自ら躍然として意識の域内に現はれ來り個人的存在の外に宇宙的存在ある所以を絶叫す固より智力全からざるものは之がため心外に人類以上の一物ありて人心を支配するが如くに思ふと雖其實は唯個人的生涯の迷妄を離れて宇宙的生涯の眞實に到達せんとするに過ぎざるを見るのみ

(一)今或は父、或は母、或は妻、或は子、或は朋友を失ふとあらんに吾人の情は決して彼の色身の亡滅すると同時に其生命も亦亡滅すべしとなす能はずたとひ其血肉は腐爛すべきも其生命は竟に亡びざるべしとの思想は自ら油然として起り來るなり因て以爲らく若し靈魂なるもの有りて一定の場所に生息するも圖られず而して其場所たる全然此世界を離れたるものにあらす往々にして大に關係ある所以を示現すべしと好し這般の思想は迷妄の見に過ぎずと雖其宇宙的生命ある所以を微かに感じたるの跡は蔽ふべくもあらず

(二)古より憾軻不遇に一生を送りたるものは皆思惟すらく我善を行じ正を蹈むと雖世人の盲目なる我を捨て、顧みず却て我を窮困の域に陥擠して彼等の情慾を満足するに便ならしめんとす不知天道果して是なる乎正人を困しめて邪人を榮はしむ嗚呼何を其れ然らん天定ましか時到らば吾心の光明正大なるは自ら世に知られん知られずとする

も天は決して邪に與せず我道を非何なるとあらん人の窮するや必ず天を呼ぶ其天の何たるを問ふに至りては固より漠然たる思想を有するに過ぎずと雖窮困は自ら人心をして更に人心よりも大なる者あらんとの信仰を白状せしめずんばあらず彼必ずしも天地に道義的大原則あるを自覺せずとするも而かも冥々たる所一種抵抗すべからざるの力あり彼をして強ひて此言を發せしめざれば已ます何となれば人心は斷じて個人的生涯に安んずる能はざるものなればなり

(三)次に我執の一念子機に觸れて勃然として翻起するや其勢鐵石をも碎かんばかりにて殘酷慘烈なる所業をなして少しも憚からざるとあり此時に當りてや其敵を斫り其肉を噉ひ其屍を辱かしめ其流血淋漓たるを見て嬉然として夜叉の情を慰す然れども一旦情穩に心靜まるるとき昔時の記憶忽然として頭を掻げ來らんとするや心神俄に錯亂して狂亂昏迷前後を辨せざるに至るは何の故ぞ蓋し情激するときは我

執の念獨り旺盛にして殘忍酷薄の行をなし得るも一旦情波平潮に歸するときは妄念の雲晴れて宇宙的精神の光獨り耀く乃ち自己の外に一物あることを知覺するが故に向きの殘忍を喜びたるもの今は却て鋒を逆にして我を困しましめんとす故に殘忍の行愈々高くして我を困むること愈々烈し困又困の極遂に心神迷亂して癡狂となる是れはた宇宙的精神の個人的感情を逼迫するに外ならざる也

(四)又次ぎに吾人の宗教的思想を不知不識の裡に發動するは其生命を危うする時に在り太平洋に航して颶風に遭ふとき山岳崩れ大地裂けんとするるとき白刃の下に臨んで身首將に處を異にせんとする時病魔四體を苦めて七顛八倒するときは是等の場合に遭遇するものは或は一時に昔日の惡業を追懷して未來の苦患を恐れ或は絶叫大喚して神佛の冥助を求めざるはなしは何の故ぞ未來の應報を恐るゝは宇宙的道義的大原則の世界に行はるゝ所以を直覺するがゆゑに非ずや神佛の冥

助を求むるは個人的存在の外別に絶対無限のものあるを直覺するがゆゑにあらすや彼等固より智慧なし祖先より代々經驗遺傳によりて這般直覺的能力を具有すと雖此宇宙的絕對的道義の大原則を以て相對の外に獨存すと誤想せるならんされど此誤想の基礎となれる宗教的概念は自ら眞理たるを失はざる也

是等は人心が逆境に處したる時自然に發現する宗教的現象なれば其傾向の往々にして厭世主義消極主義なるを免かれずと雖其順境に處するときは宗教心も亦愛世主義積極主義の假面を蒙りて發動するを見るべし即ち功名を欲するの念徳者を慕ふの念無常を感ずるの念の如き是也

少年血氣の徒常に思へらく男兒須く功名をなすべし功名は須く千歳の下に赫くべしと思ふに孰れの世の人か功名界裡に浮沈して只功の成らんことを欲し名の揚らんことを欲せざるものやある彼等が日々

夜々營々として或は罪惡を犯し或は善行を行ふ所以のものは只一片功名の念に驅らるればにあらすや然れども功名彼はたして何の力ありてか此くは人を動かさんとする功成り名遂ぐるの日は則ち吾人の隻脚既に棺木裡にあるの時也血氣耗し利欲衰へたるの時なり而して其身死するに及んでは冥然として意識なし誰か其功名を喜ばんとするたどひ功名を千歳の下に流して子孫之を欽仰するも吾既に地中の人誰か其欽仰するを見て喜ばんとはする功名の念たるそれ此の如く空也而して少年血氣の徒皆此の空想に驅られて山林荆棘の間をも厭はずして馳驅奔走すは何の道理ぞ他なし彼等は功名に驅らるゝにあらずして不生不滅に驅らるゝなり不生不滅は宇宙的なり功名は個人的なり彼等は我執の纏縛する所となるが故に不生不滅の深奥に達せず僅に功名の念を通じて之を感得す功名の念は即ち不生不滅が個人的主我的假面を被りて發現したる也彼等の畢生の力を竭して逐ふも

亦故なきにあらざるを以て積極的に人心の宗教的たる所以を明にするものとなす非なるか

次に人心の徳に感ずるや些少の安排計較を假らずして自ら然るものあり必ずしも其人の智高きにあらず學博きにあらず才敏なるにあらず位地尊きにあらず權力大なるにあらず財力豊かなるにあらず而して一たび其面前に出づれば恰も一種の電氣に感じたる如く肅然容を改めて恭敬禮拜せずんばあらず又恰も胎蕩たる春風千里の裡に吹かれて立つが如く其心寛かに其胸開けて自ら天地と其大を同化するの感なくんばあらず又恰も孩兒が慈母の懷裡に眠るが如く其心は有限の囹圄を脱離して無際宇宙に立ち晏然として平靜なるの思なくんばあらず至徳の人を化する實に此の如きものあり知らず至徳何に由りて這般の魔力ある乎若し吾人にして只有限無常の快樂を逐ふの外一點道義の感なくんば嗚呼如何にして此の如くなるを得んや若し吾

人にして個人的存在の外一物なしとせず道義を直覺する此の如くなるを得んや人心は到底宗教的ならずんばあらず

豈に管徳に感ずるのみならずや吾人は之に感ずると同時に亦能く自ら之を實踐せんとするの念あり即ち吾人は受動的に他の圓滿なるを感ずるを以て満足せず必ず自ら亦進んで能動的に這箇圓滿の境に入らんとするの念を生ず而して其一たび我執の念に罣礙せられて脱洒自在なる能はざるときは或は自ら顧みて慚愧の感に堪へざるべし或は益々奮つて猛進直往せんと志を生ずべし何れにしても吾人は圓滿なる道義的理想を前に置き而して力を盡くして之に達せんとするを禁ずる能はざる也是亦宗教的勢力の發動なりと言ふを得ざるか

又次に吾人は快樂の無常なるを感ず是寧ろ消極的に宗教心の現はるるものに似たれども快樂なる積極的活力に伴隨して生ずる一種の心象なれば暫く此に列擧して説く必ずしも不可ならざるべし蓋し吾人

の快樂を逐ふや一を得れば更に二を得んと欲し二を得れば更に三を得んと欲す得る所愈々多くして望む所愈々窮まらず而して其無邊無限なる快樂を逐ふに當りてや吾人は忽然として其無常有限なるを悟るとあり必ずしも窮困に處したる時のみ有爲轉變の理を感ずるにあらず意昂り氣滿ちたるるときと雖一たび機に觸るれば翻然として昨非を感得す所謂歡樂極まりて哀情多きもの蓋し人心は自ら無限常住ならんと欲すたとひ一時は快樂の轉變すべきを悟らず淺薄なる満足を買はんとすも雖自然の性理は之を許さず猶ほ電光の閃々として黒雲暗澹の間より洩れ出づるが如く我執的快樂の暗黒を破りて宇宙的光明の放射し來るを見る而して一たび其光明を瞥見するや復た快樂を以て事とする能はず或は厭世の凶音を吐かんとするものあるに至る人心は順境の快樂中に在りても尚且つ宗教的たらざるを得ざるものある也

由是觀之人性は本來宗教的なりと謂はざるべからず我執の妄念に迷はされて三毒五慾の情火に責めらるゝことありと雖本來自然の傾向は遂に滅却すべくもあらず機に觸れ縁に遇へば則ち忽然として或は積極的に或は消極的に其本體を脱露せずと云ふことなし其之を自覺すると否とは固より問ふ所にあらざるなり

一種の宗教家は人心の此種發動をなすを見て其由て來る所を説明して曰く人類は神の特造なり人心は神性の影像なり故に人の宗教性なるは自ら其本源に歸らんとすればなりとされど吾人はさきに天地外別に神なるものなき所以を説明したり今人性の宗教的なるを見るに及んで遂に神を建立して其本源を此に定めんと欲せば是れ矛盾の甚しきもの吾人豈に人を以て神の所造となすべけんや況や神なしと雖人は宗教的なるを失はず神の有無は人性と相關涉せざるにおいてを

や
 吾人は寧ろ人を以て神を造りたるものとなす何となれば神は人類が
 具有する性徳の外一物も増減する能はざれば也人は神の影像にあら
 ずして神却て人の影像也吾人は人心の宗教的なるを以て神の所爲と
 なす能はず若し果して神の所爲ならんには神は何處に其宗教思想を
 得たりとする乎是れを以てを説かんとするもの疑問に答ふべき所
 以を先づ假定して而る後疑問を提起したるもの吾人豈に這箇迷妄の
 見に満足すべけんや
 人類はその宗教性を何處より得たりと云ふ是既に傳授者の存在を先
 決したるなり神之を授けたりと言ふは是れ答ふる所以にあらずして
 問題の中既に之れを先決したるなり故に吾人の見處に約すれば元來
 這般の問題を提起するの要なし人性は宗教的なるが故に宗教的なり
 水は流るゝの性あるが故に流れ山は高からんとするの性あるが故に

高し是れ本來具有の性に由りて自ら然る也他の安排計較を假りて始
 めて然るを得るにあらずかの神なるものを求むるは頭上に頭を重ぬ
 るの類也上來の諸章及以下を通讀せば讀者亦吾人の意見を明知する
 を得ん乎

神なる超絶的實體を求めて人性を説明せんとするものは又人類を以
 て次第々々に墮落するものとなす所謂イヴの一過失によりて「エデ
 ソ」の樂園を失ひし以來人は神性の至純無垢なるを失却して魔界に下
 らんとなすもの是也されど人心を以て上古に純粹にして後世に至る
 に従ひ汚雜に赴くとの思想は基督教に限れるにあらず支那の如き印度
 の如き亦幾分か此傾向を有せり然れども這箇の思想は人類の銳氣
 を挫き理想の現實を妨ぐるはあらず豈に啻一片の妄想にして止まん
 や

人

吾人は來時の路如何を問はず一向勇往直進して希望多き前途を踏
 せんと欲す理想を上古に失却せりとなさずして之を後世に成就せんと
 欲す即ち保守退嬰の舊思想を棄て、改善進取の新主義を取らんと
 欲す人類は代々に退化するにあらずして進化せんとするもの也進化
 の途上一時紛擾混雜の状態に沈むとあらんと雖是は吾人が更に一段
 の進歩をなさんため舊來の弊習を脱却せんとする過渡の現象に過ぎ
 ず若し眼を大にし想を廣くして人類進化の全體を看ば吾人の蠻民を
 去る幾千里なるを知らず豈啻物質的進歩のみと言はんや其道德にお
 いても宗教においても遙に原始時代の人民に超越するは瞭々として
 炬の如く明ならん試に看よ人類の發達は經驗を加ふる毎に一步を進
 むものなるを嬰兒の幼童に於ける幼童の青年における青年の大人に
 おける吾人は一期毎に其智其徳の進歩するを知る未だ曾て次第々々
 に退化するを聞かざる也人種的生活は猶個人的生活の如し古を以て

人

今に優れりとなすは淺見狹識者の言なり
 青年時代に在りては或は幼童時代の天真爛熳たるを失はん彼等は面
 に笑ひて心に怒り口に背ひて胸に信せず或は譎詐百端或は巧智横出
 其徳大に幼時に劣るもの有り然れども青年時代は進歩の途中なるを
 忘るべからず其更に高等の進歩をなし智徳圓滿に近づくときは一層
 の光彩煥發し來りて復舊時の人にあらず人類全體の進歩も亦此の如
 きのみかの吾人が常に究竟圓滿を現實にせんとするが如き進んで取
 るとなさず徒に退きて守らんとせば豈に此處あらんや一步又一步
 不完全なるもの不圓滿なるものを棄て、而して之を圓滿にし之を完
 全にするによりて始めて理想の域に到達す吾人はかの守株家を學ぶ
 能はず
 世の論者往々にして眼を全局の上に注がず僅に一部分の觀察を以て
 事物の真相を評し去らんとす猶は盲者の象を摸するが如し或は隻脚

を、取、り、て、象、と、な、し、或、は、尾、巴、を、以、て、象、と、な、し、或、は、鼻、頭、を、以、て、象、と、な、す、
 且、喜、す、ら、く、は、象、な、る、も、の、此、に、在、ら、さ、る、也、今、現、時、の、状、態、を、以、て、人、類、進、
 歩、の、極、度、と、な、し、現、今、の、状、態、を、支、配、す、る、一、時、の、勢、力、を、以、て、究、竟、の、原、則、
 と、な、し、而、し、て、宇、宙、全、體、を、評、し、去、ら、ば、危、険、も、亦、甚、し、か、ら、ず、や、吾、人、は、人、
 心、の、無、限、に、發、達、す、べ、き、を、見、る、何、と、な、れ、ば、吾、人、は、常、に、現、在、を、以、て、滿、足、
 せ、ず、一、步、を、進、む、れ、ば、更、に、一、步、を、進、め、ん、と、欲、し、而、し、て、實、に、其、一、步、を、進、
 め、得、れ、ば、な、り、無、限、の、發、達、を、な、し、て、究、竟、圓、滿、の、理、想、に、達、す、る、に、あ、ら、さ、
 れ、は、吾、人、は、決、し、て、大、安、穩、を、得、さ、る、也、

第八 無我 (靈魂實有説の妄を辯す)

宗。教。の。目。的。は。安。心。立。命。の。處。に。在。り。佛。教。に。て。は。之。を。成。佛。す。と。曰。ひ。基。教。
 に。て。は。之。を。救。濟。を。得。た。り。と。な。す。而。し。て。安。心。立。命。は。如。何。に。し。て。得。ら。れ。
 ん。か。と。曰。ふ。に。譬。へ。ば。磁。石。を。針。頭。に。安。ん。ず。る。に。似。た。り。只。其。本。來。具。有。の。
 性。を。し。て。惹。絆。す。る。所。な。く。自。由。に。活。動。せ。し。む。れ。ば。則。ち。足。れ。り。今。針。頭。の。
 磁。石。別。に。鐵。屬。の。妨。碍。電。氣。の。拘。牽。支。柱。の。摩。擦。な。け。れ。ば。自。ら。其。本。性。の。發。
 する。所。に。ま。か。せ。て。北。極。に。向。は。す。ん。ば。あ。ら。ず。さ。れ。と。少。し。に。て。も。外。物。の。
 來。り。て。之。を。繫。縛。す。る。と。あ。ら。ば。則。ち。當。に。其。本。性。を。曲。げ。て。不。安。の。位。置。に。
 立。つ。な。る。べ。し。故。に。人。心。も。亦。其。自。由。を。纏。縛。す。べ。き。千。種。萬。様。の。煩。惱。妄。想。
 を。掃。蕩。し。盡。く。し。て。本。來。具。有。の。進。路。に。就。か。ば。四。通。八。達。行。く。と。し。て。活。脱。
 な。ら。さ。る。は。な。け。ん。是。に。至。り。て。ま。た。何。の。安。心。不。安。心。と。説。か。ん。や。
 妄。想。煩。惱。之。を。迷。と。曰。ふ。迷。の。本。は。智。鏡。の。光。透。徹。せ。さ。る。に。在。り。蓋。し。實。我。
 の。思。想。は。貼。肉。の。汗。衫。に。似。た。り。粘。着。縛。着。容。易。に。脱。却。す。べ。か。ら。ず。而。し。て。

この無始劫來の無明のありによりて智鏡圓明を缺き曖昧模糊として萬境を照破する能はず影を逐ひ跡を覓めて五十年の行路夢幻裡に經過したる
 嘗て聞く沙漠を旅行するもの遙に綠樹清泉の鬢髯を認め走りて之に就かんとすれば杳然として隻影だにもなし乃ち氣餒る神倦みて復一步をも進むる能はざること往々にして之れありと迷者の快樂を逐ふ亦此の如きか轉近づけば轉遠く愈逐へば愈遁る剩す所は困憊あるのみ樂を求めんと欲して却て苦に就き喜を得んと欲して反て憂に沈む顛倒も亦甚しと謂ふべし而かも是れ實に世の快樂を求むるもの、常態彼等の生涯は煩悶苦痛を反覆するに外ならざるなり
 無限の時間より見れば一刹那にも如かず無邊の空間より見れば一微塵にも如かず而して迷者は此假合的色身の生涯をとりて實に我の所有となし常住主宰の見に執着して一言一行皆是より流出せしめんと

す、是を以て日夜に營々皇々として此衣架を飾り此飯甕を肥やさんことを計る而して其漸く裝飾を了り肥大を得んとするに當りて一團の劫火忽地に燃え起りて四大を焚き盡せば冷灰白骨北邙の嶺に堆らんとす一波纒に動きて千波萬浪隨ひ來り一慾忽ち生じて百八の煩惱紛然として競ひ起る殆んど底止する所を知らざる也
 欲望と満足とは振子の如し振子の動くや一方に上る一尺なれば他方に上る亦一尺而も振子は此一尺を上り得て満足するにあらず更に以前の方向に轉じて復又一尺を上る此の如くして左動右搖決して一定の中心に休止することなき也一欲足れば更に一欲を呼び一念止めば又一念を生ず轉々して暫くも休する能はざるは欲の常也故に宗教は先づ根本の慾情をされと曰ふ根本の慾情だに、鋤去し得ば復た震蕩動搖の患なかるべく而して安心立命の地永く定まるべければ也
 何をか根本の慾情と曰ふ曰く實我の一念子是也唯此一念子あるが故

に八萬四千の煩惱蜂の如く起る煩惱本と性なし我執の一慾に繋がれて種々の作業をなす耳看よ我にして實有にあらすとせば何をか貪り何をか瞋り何をか迷はん自ら好んで我と云へる暗窟裡に在るがため彼を執し此を貪りて皆吾有となさんと欲すと雖一旦我執の一念子を一踢に踢翻して本地の風光に接せば汝の心湛然として天地と共に廣潤に萬物と共に睥睨ならん此くして一絲の脚を纏ふものなければ汝は意に任せて東奔西走而かも毫末の煩悶愁苦の之に伴ふなかるべし

實我或は之を靈魂と云ふ心意諸般の現象の外に一箇の實體ありと妄想する是也此妄想實に諸惡業の根本となりて大に人心を荼毒するが故に吾人は近代の心理學に由りて此實我説即ち靈魂實有説を排斥せんと欲す智鏡を昧ますの雲霧を掃ひ去れば其感情も亦自ら正路に向ふを得ん乎庶幾くは此の如くにして道德上求むるなきの愛を煥發し

得ば吾人が特に此章を設くるの意亦足れりと謂ふべき也

かの舊思想を抱くもの或は迷執の見に滯るものは思へらく人心の中には神妙不思議の一靈性ありて心意萬般の活動を指揮す視るは眼に非ずして眼裡の靈魂也聽くは耳に非ずして耳裡の靈魂なり乃至或は思惟し或は願望し或は感受するは心意にあらずして心意の底面に實在せる靈魂なり而して又此一物手に在りては執捉し足に在りては運奔し腸胃に在りては消化をなし肺腑にありては呼吸をなす活潑々地にして終古倦まず形骸を假りて其用を現すと雖其體は大に之と異れり超然として萬象の外に獨脱す我の中心は即ち此に在りて存せりと」

蘇格蘭の大哲學者ヒューム曰く予はかの世人が呼んで我と曰へる一物の中樞に如何なるものやあると思ひ様々に推考すれども毎に寒暖光影愛憎悲苦など云へる諸知覺あるを感ずるのみ予は知覺なき心狀即ち空々寂々たるを覺はたることなし予は實に知覺の外に一物あるを

知らず……若し人あり虚心平氣に自省靜慮して而して知覺の外別に
 自己なる一物を感得たりと曰は、予は最早や彼と相争ふ能はず予
 は只彼も亦是なるべし予と彼とは本來其性を異にせるなりと云ふよ
 り外なからん彼或は自個と云へる純一にして永遠なる實體を知覺し
 得るならんされと予に在りては決して這般底を知覺せざるを信じて
 疑はずと

近代の心理學は正にヒュームの所説也吾人が呼んで我と云ふときは或
 は其身體をさすか或は其一部分をさすか或は心裏の一概念を指すか
 に過ぎず然るに實我論者は之に反して我と曰ふものと我有する所の
 思想とを全く別物となして思へらく我は其思想の所有者にして其思
 想の外に超絶せる一物あり吾の吾たる所以彼の彼たる所以は此一物
 即ち我なるものあれば也とされと近代心理學は之を排して取らず我
 と其思想とは同一なりと曰ふ即ち吾は述べんと云へる我と其述ぶる

所の思想とは同體不二なりと説く例令へば我文字を書せんと云ふ如
 き我なる實在と文字を書せんと欲すとの願望とは個々獨立の別體に
 あらず願望即ち是れ我我即ち是れ願望願望の外に出で、這箇神祕の
 實在を求むるも豈に此處あらんや

若し我なるもの實に有りとせば思ふに必ず常住不變の者なるべし然
 るに其實我は時々刻々に變遷して少しも留まるとなし或時は彼或時
 は此時に隨ひ物に應じて轉々化々山に對すれば山即ち我水に對すれ
 ば水即ち我行かんと欲すれば只管に行く是れ即ち我止まらんと欲す
 れば只管に止まる是れ即ち我此外別に我の實體即ち概念感覺など云
 へる心意的活動を離れたる超絶的存在は決して之れあるなき也

之を家屋に喩へん乎其柱礎を去り其四壁を去り其床板を去り其棟梁
 を去り其屋瓦を去りて而して其厦屋なるもの、實體を求むるに遂に
 不可得也厦屋は柱礎四壁床板棟梁屋瓦等一切の組織に由りて始めて

無

我

存在するを得たる也固より厦屋は其柱礎にあらす其四壁にあらす其棟梁にあらす其屋瓦にあらざるべし而かも是等を離れて厦屋は獨存すべきにあらす畢竟厦屋は一個の様式なり柱壁棟梁等を容れて始めて全し蓋し様式と内容との關係は相離れず相合せざる所に在りて存するなり

固より人心は厦屋の如く形而下的物體にあらざれば其諸活動を分割して個々に獨存せしむべからず感ずるときは其全體を以て感じ動くときは其全體を以て動き思ふときは其全體を以て思ふ只吾人が研究に利便を與へんため抽象的に或は意志或は情緒或は注意或は智慧或は概念或は性質なる綱目を分類すれども其實は全系一統分毫の分割を容れざる也此統一的作用を心理學にては意識の統合と曰ふ而して此統合を目して我となす故に我は實體にあらすして空式なり自存獨立の實在にあらすして必ず之を填充するものあらんを要す我とは其

無

我

填充物の全系に名づけたる記號なれば也吾人は日常我は何々の思想を有すと曰ふされど若し正當確實ならんと要せば當に我は何々の思想より成立すと曰はざるべからず我の所有と稱する思想以外別に實我なるものなければなり

疑ふもの或は曰はく若し我を成せる諸種の心意的活動にして時々に変動するとせば昨日の我は今日の我にあらす今日の我は又明日の我にあらざるべし然るに吾人は心意活動の尙微弱なりし幼童時代と既に旺盛なる成人時代とを通じて共に我となすは何が故ぞ昨日と今日とにかいてすら其我たる所以に變動ありとせば幼童時代と成人時代と相去る頗る遠し同一の我とは到底思はれざるに似たり而して吾人は依然として舊時の我たるを感ずとせば諸般の心意的活動の背面に常住主宰の己靈なるものなからんやと

是未だ深く思はざる也先づ我の實體あるべしとの假定を設けて而し

て、事實を説明せんとするが故に却て、經驗に乖くを免かれず、今又喩を家屋に假りて之を説かん乎其木柱を鐵棒に代へ其茅屋を煉瓦に改め其紙障を硝窓に變じたりとするも厦屋の存在は依然として舊時の存在を繼續す昨日も人を棲ましめ今日も人を棲ましむ畢竟同一の厦屋たるを失はず心意も亦然り心意を構成せる諸種の活動は時の遷るに従ひて發達して極なかるべし或は舊時の思想と今日の思想と抵觸すること屢之れあらん即ち昨は有神論者となり今は無神論者となる兩者枘鑿相容れずと雖亦是同一の人たるを失はず何となれば其様式の存在依然として尙舊時の如く相續すれば也其思想は時々變遷すべし而して思想は其心意の同一と非同同一とに相關涉することなきが故に如何に變遷するも妨げなし但諸般の思想を統合せる様式に舊の如く相續するとせば幼時の我は即ち成人の我なり猶庭前一株の薔薇花香馥郁なる時も落葉紛々たる時も依然として同一の薔薇なるが如

論者又曰く然りと雖感情の發達する意思の成長する智力の啓發する登に偶然なりと謂ふべけんや豫め期圖計畫するものありて是等諸心力の發達關係を司るとせば却て會得し易きにあらずや如何に同一の感覺を反覆したりとて別に我と曰ひ靈魂と曰へる一實體の存在を許すにあらざれば其間に意識を生ずるの理解し難かるべしと實我の存在を否むは猶人性的造物主の存在を否むが如し宇宙に造物主なしと曰ふは即ち心意の外に實我靈魂なしと曰ふもの也彼等は萬物を以て枯木死灰の觀をなし外來の力を假るにあらざれば活動する能はずとなす彼等は寧ろ極端の唯物論者にあらずらんや化學的原素は物の最も單純なるもの也而して酸素は自ら水素と合して水を生じ炭素は自ら酸水窒の諸原素に合して有機體を生ず是に於て原始生物あり原始生物は化學的抱合の最も複雑高等なるものにし

て而して生物的現象の最も單純下等なるものなり之を生物の最上級に位せる人類の神機妙用なるに比せば其懸隔恰も異性の看あり而して又之を化學的抱合の單純なるもの即ち無機體に比せば其懸隔又異性の看あり然れども仔細に看來れば原始生物を構成する原素は即ち水石の如き無機體を構成する原素也水石の如き無機體を構成せる原素は即ち人類を構成せる原素也故に一切萬有は同一の原素より組織せられ其組織の單複により意識の活動感覺の發現に大小強弱の差別ありと謂はざるべからず意識は生物にのみ之れあるにあらず無機體にも亦之れある也但無機體に在りては其發動極めて單純にして生物の意識と頗る其趣を異にするの看あれども原子の活動を見れば自ら生々の理一切萬象に具はれるを會するならん果して然らば生物界中に在りては最高等の位地に立てる人類にして殆んど不可思議の作用をなし發達をなすも固より當然の理ならざるべき乎

且試に水素の二原子が酸素の一原子と抱合して水となるを看よ而して又此水が一定の温度の下にて結晶するや酸一水二の各分子が悉く一定不變の角度を以て結晶するを看よ化學的原素の如き單純なるものすら各自本來具有の性能によりて此の如く靈妙の作用を現出し得るとせば人間にして豈に微妙の活動をなし得ざるの理あらんや故に吾人は靈魂又は我と云へる不可思議體の先づ存するありて而る後心意的諸活動をなすと説く能はず否我なる概念は心意活動の結果として始めて現出するを得る也我は心意的現象の原因に非ずして其結果に過ぎず若し諸種の感覺にして只感覺なるに止まらば我の意識は到底生ずる能はざりしならん人心本具の性力に由りて諸感覺の組織統一を生じたるにより此に始めて意識を生じ我想を生ずるに至りし也實我論者即ち靈魂實有論者は本末終始の辯をわすれたる也我と曰へる一小念子は頗る動搖し易き性質を有せり瑣細の刺激に應

いて直に意識の前面に現出し來らんとす是を以て誰か之を爲す誰か之を言ふ誰か之を思ふなどの疑問を發するときにはかの一念子迅急に現はれ來りて曰く吾之を爲す吾之を言ふ吾之を思ふと是に於て乎人をして我てふ一靈體ありて心裡に潛むとの思想を生せしむ而かも我なる概念の此思惟此行爲に對して何等の關係をも有し得ざるは猶ほ空氣と曰ひ草木と曰へる概念の如きなり何となれば我は草木空氣人間天地などの概念の如く一個の概念に過ぎざれば也

疑ふもの或は又思へらく今或る事を企圖し撰擇すとせよ其彼を取らずして此を取り左に行かずして右に行くは何ものゝ所爲となすべし乎概念以外に一物ありて之れが撰擇企圖をなすにあらざれば安ぞ爾かく靈妙なるを得んや概念だけにては無力に過ぐるの感なき能はずと

是亦好んで事を神秘にせんと欲するもの既に化學的原料の如きすら

自己具有の活カによりて離合自在也況や彼の人心は天地生々の活カ之最も圓滿に發現したるもの何ぞ必ずしも這箇神怪力を假らんやまづ數個の概念ありて一時に意識の中に生ずとせよ之を生理的に看れば腦髓を組織せる細胞の一部分に震撼を生じたること猶ほ風波の水面に狂ふに似たらん乎之を心理的に看れば數箇の概念或は衝突し或は相排して優勝劣敗の理此間に行はるゝときは吾人一種の迷悶を感ずべし而して弱きもの徐々に滅し去りて強きもの獨り意識を横領するときは順風恬波に帆を上ぐるが如し是吾心決するの時節也是の如くにして種々の計畫を案出し種々の決意をなす皆他の安排計較を假らずして任運に自ら然り何ぞ我の實在を要せんや

由是觀之實我論者及靈魂實有論者は事實を精駁して而して始めて理論を得たるものにあらず先づ我なるものあらんとの假定を胸中に措きて而る後事實を粗畧に研究して假説を證明せんとするもの也宜な

り、其、吾、人、日、常、の、經、験、に、反、き、事、實、に、戻、る、の、み、な、ら、ず、倫、理、の、上、に、あ、り、て、
も、沒、理、の、主、義、を、唱、ふ、る、に、至、れ、る、や、

無

我

心理學上無我の道理を會得せば宗教上何等の影響を生ずる乎
既に我として執着すべき實體なしと云ふさらば彼此人我の見何の邊
よりか起るべき我は差別の見なり我なければ平等の性自ら明かなら
ざるを得ず平等法海中千波萬浪日夜に動くと雖畢竟是同一鹹味也各
六尺の軀を有して五十年の間經營奔走すれば個々別々なるに似たり
と雖同じく是れ進化の大潮に浮びて彼岸に到らんとするもの人我の
間に畛域を設くるは迷妄のきはみならずらんや世人但此迷妄の鐵鎖
に桎梏せられて自由を得ざるが故に快樂を逐ふて却て悲苦を招く我
の幻妄なるを認めて一向其保存に汲々たるが故に亦快樂の幻妄なる
を認めて涅槃の觀をなす此の如くにして日を度らば人生は子子の汚

無

我

水中に上下轉輾するが如くならんのみ
然れども一たび我執の窟宅を撃碎し了らば身は恰も囹圄を出で、青
天白日の下に來れるが如く宇宙の靈氣を吞吐するの感あらん乃ち知
る我生は忽然として來り忽然として去るにあらず我の今日あるは天
地の今日ある所以なり我は萬物と共に來り萬物と共に住す人我の區
別ある六尺の軀は夢幻泡影に似たりたとひ迷者の眼は之を認めて常
住不變の想をなし人我不同條の想をなすも夢覺め影消ゆれば則ち元
來我即是彼彼即是我なる也萬里一條の生鐵何の處に彼と我とを區別
せん是に於て乎快樂逐ふに足らず痛苦避くるに足らず只是嶺上一片
の白雲縁に任せて飛び來り飛び去る生あれどもなきが如く死あれど
もなきが如く遊戯三昧ならずと云ふことなけん
煩惱の中心は我を執するに在り而して今や此我なし貪瞋痴の三毒犯
し來らんとするも其犯すべきものなきを如何せん是に於て乎博愛の

無

情油然雲の如く起り慈悲の心沛然雨の如く注ぐ我を愛するの情は直に是れ人を愛するの情我を利するの心は直に是れ人を利するの心兩者元來別物にあらず迷ふが故に自利私慾となりて我を奈落に陥れ悟るが故に無邊の慈悲となりて人のために粘を去り縛を解く故に佛者は菩薩の四句の誓願を説く曰く衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願斷法門無量誓願學佛道無上誓願成と是れ豈に徳の圓滿なるものにあらずや

我

今人往々にして實利主義自愛主義を説く思へらく人間處世の目的は幸福に在り最大幸福を最大多數に受用せしめば則ち足れり幸福とは快樂なり自ら樂み人も樂む限りは如何なる種類の快樂を逐ふも何の妨かあらんかの他を愛するの情の如きも畢竟自己を愛するの一念子より發したる也と

現今我國の精神界を攪亂するは實に此主義に在りされど此主義の幻

無

妄なるは猶我の幻妄なるに似たり何となれば彼等が汲々として得せんとする所の我は何の處にも求め得べからざれば也彼等は幻妄の我を喜ばせんと欲して汗を流し血を流して僅に幸福なるものを得て將に之を我に與へんとするに當り我は杳然として烟散霧消す吾人は轉彼等の失望を憐ますんばあらず人生の悲惨なるは只我の一念子に執着するに由る而して快樂主義は之をして益々甚しきに至らしむ猶油を薪火に注ぎかけたるが如し其危険なるや知るべきのみ吾人が絶叫して快樂主義を打破して無我の眞理を發揚せんとするは實に之がためなり

我

尙無我説より不生不滅を生ずる所以は次章に於て之を分解せん吾人は今此に東嶺禪師が大悲の文を引かんとす蓋し無我の理を證すれば大悲を生じ大悲を生ずれば諸の善事成れば也

是故に修行の正路は願を以て本となす願力深重なるものは天魔外道

も動かす能はざる所也願力微弱なるものは多く障難に遇ふ夫れ願力
 とは大悲を本となす凡自利を求むるものは皆小見に止る譬へば商人
 の己が榮を圖るものは先づ小財に誇り普く物を惠まんと欲するもの
 は小を以て足れりと爲さるが如し是故に四弘の願行には先づ度生
 (衆生)を以て第一の誓となし而して自性を明らかに煩悩の本を斷じ普
 く法門を學んで菩薩の行を起し悲智圓滿する是を佛道と謂ふ當に知
 るべし大悲は實に成佛の基本也

「熟一切の衆生を見るに本を捨て末を逐ふて諸業に貪着し此に死し彼
 に生じて諸趣に輪廻す天上の五衰人間の八難餓鬼畜生地獄の極苦試
 に彼の心を以て我心に比況して看よ況や又一切の衆生は皆是れ生生
 の父母世世の兄弟なり其恩愛における恰も今日の如し之を察し之を
 慮るに切に須く大悲心を生ずべし

「華嚴普賢行願品に曰く若し衆生をして歡喜を生せしむるものは則ち

一切の如來をして歡喜せしむるなり何を以ての故に諸佛如來は大悲
 心を以て體と爲し給ふが故に「衆生に因て大悲を起し大悲に因て菩提
 心を起し菩提心に因て等正覺を成ず譬へば曠野砂磧の中に大樹王あ
 らんに若し根水を得れば枝葉花果悉皆繁茂するが如し生死曠野の菩
 提樹も亦復是の如し一切の衆生を樹の根となし諸佛菩薩を華果とな
 し大悲の水を以て衆生を饒益するときは則ち能く諸佛菩薩の智惠を
 成就す

是故に大悲は天の如し普く一切衆生を覆ふが故に大悲は地の如し悉
 く一切の法門を生ずるが故に大悲は能く佛性を見る他の爲に先づ眞
 智を明むるが故に大悲は能く牢關を透る他の爲に益々深法を究むる
 が故に大悲は能く向上に徹す他の爲に別に生涯を求むるが故に大悲
 は能く方用を成す他の爲に勉めて此道を行ずるが故に大悲は能く勇
 猛を起す他の爲に常に憤志を生ずるが故に大悲は能く不退に至る他

の。た。め。に。此。心。決。定。す。る。が。故。に。大。悲。は。能。く。廣。學。を。成。す。他。の。爲。に。普。く。一。切。を。究。む。る。が。故。に。大。悲。は。能。く。多。聞。を。成。す。他。の。爲。に。深。く。物。理。を。推。す。が。故。に。大。悲。は。能。く。威。儀。を。成。す。他。の。爲。に。念。々。失。せ。さ。る。が。故。に。大。悲。は。能。く。福。德。を。成。す。他。の。爲。に。常。に。方。便。を。起。す。が。故。に。大。悲。は。能。く。煩。惱。を。滅。す。他。の。爲。に。身。命。財。を。捨。つ。る。が。故。に。大。悲。は。能。く。名。利。を。離。る。他。の。爲。に。皆。實。義。に。基。く。が。故。に。大。悲。は。能。く。法。界。に。入。る。他。の。爲。に。至。ら。さ。る。所。な。き。が。故。に。凡。そ。大。悲。の。德。は。廣。大。無。盡。に。し。て。多。劫。に。演。說。す。と。も。遂。に。極。め。あ。る。こ。と。な。し。

第九 不生不滅

人生五十果して草頭一顆の露の如き乎其生や忽然として寂寞無爲の處より來り其死や又忽然として寂寞無爲の處に去る乎四大分れ五蘊散する時は空々寂々として一塵も留まるなき乎はた又生命は代々に相續して空劫已前威音已後生もなく滅もなきか其相を改め其形を更ふと雖綿々として三世に貫通すること猶一絲の珠顆を繋げるが如きか昔者釋迦牟尼の沙羅雙樹の間において大般涅槃に入らんとするや諸弟子に告げて曰ひけらく「吾滅度すと云ふも吾弟子にあらず吾滅度せずと云ふも吾弟子にあらず」と世尊の意那邊に在るかは暫く問はず生命の滅否は實に人生の一大事なり倫理宗教諸問題の中心點なり吾人處世の覺悟如何は此問題の肯否に由りて決定すと云ふも不可なかるべし故に宗教を説かんには必ずや不生不滅の一章をおかんと要す」吾人は之を主觀的方面に照らし客觀的事實に考へて實に不生不滅の

道理あるを信するものなり

まづ吾人をして人心奥祕の處に潛める信仰は何を言はんとするかを
知らしめよ

(一)人心は實に蒙昧の頃より既に不生不滅の理あるを直覺したりし也
故に如何なる蠻民の宗教と雖此思想を中心とせざるはなかるべし固
より彼等の智識の尙は未だ發達せざるや靈魂と云へる一種神怪不可
思議の實體ありて假りに此色身を以て宿舍となせるものなるを信せ
り色身は無常の風に誘はれてもとの塵に歸すと雖一片破々の靈體は
永く留りて亡びず或は一定の時期を經過するときは本來の色身に還
り來らんも計られず埃及の木乃伊の如き或は因縁熟するときは復た
他の四大假合の裡に入り來ることあらん乎此身の存在は五十年の時
間に相續し六尺の空間を填充するに過ぎざれども靈魂の神力ある永

く此囹圄の中に繫縛せらるべくもあらず靈魂の生命は實に不生不滅
なり是蓋し未開人民普通の信仰と云つて可ならんか

嘗て亞弗利加の蠻民其妻の姦夫を殺したるに妻之を慕ふて止まず遂
に其身も亦自殺して冥途に情夫に遇はんと思ひたり是において其夫
も亦冥府にて兩人の密會を妨げんがため自殺を遂げたりと曰ふ蓋し
彼等は色身亡滅の後と以て靈魂獨存の時と想ひたる也

豈に蠻蠻族のみならんや今日文明の世に在りても尙幽魂の死後に存
在するを信じ縁に任せて屢此世に現出するものとなすの徒甚だ少な
からず

蒙昧の蠻族無智の小民が靈魂を以て不思議の實在とするは前に説き
たる如く妄誕無稽の論なれども其不生不滅を信するは大に取るべき
所あるなり瓦礫の中にも時に寶玉なきにあらず妄信の中豈に亦不磨
の眞理なからんや無智者の思想と雖彼亦人心あり徹頭徹尾沒理の言

を吐くとは言ふべからず人智未開の頃は眞理を直覺すれども明に之を意識の上に將ち來りて科學的説明を與ふる能はず人類の或は思惟し或は感受し或は願望する皆必ず一定不變の理法に依らずと云ふことなしと雖其理法の何たるかを自覺するは人智啓發して高度に達するの後ならざるべからず智者と愚者とを問はず皆眞理の大海中に起臥すと雖愚者は眞理其まゝを赤條々に會得する能はざるを以て寶石も繚縷の中に包まるゝを免かれず但吾人は繚縷百結の外包を破りて其眞實體を抉出せんを要す蠻民の思想と雖豈に一瞥の下に排斥して可ならんや

(二)人心の死を思ひるに切なるや實に一種の魔力に牽制せらるゝが如きものあり愚者は只管に我執の纏縛する所となりて色身の外何ものをも知らざらんとすれども其死を思ひは思ふに色身分離の痛苦を思ひのみにあらず其更に大なるものを恐るゝの念冥々の中に動かないと

せんや生あれば必ず死あり死固より避くべからずされど人は如何にして死を以て萬事休するの時節と思ふ能はず人生を以て空中に樓閣を架したるものと思ふ能はず否思ふ難きにあらずされど一たび實地の境に處するや一種反抗すべからざるの力あり吾人をして不知不識の中に不生不滅の道理を是定せしめずんば止まざる也

(三)次に吾人が思想力の如何に廣大なるかを看よ形骸の上より説かば蕞爾たる六尺の軀之を宇宙の濶大なるに比す粟米粒を大洋に浮べたるよりも小也其生死去來天地の大と何の關涉かあらん而かも飄つて其形而上的活力を一瞥せよ其中には宇宙萬般の現象と理法とを網羅するのみならず直に之を自家藥籠の裡に收め意に任せて拈弄す天地恣麼に廣大なるも之を人心の廣大なるに比せば亦却て洋中の一粟米粒にも如かざるべし數學は以て千萬里の遠きを測量すべし天文生物の學は以て天上悠遠の星辰を數へ滴水裡に玄微の生物を見るべし時

間におけるも亦此の如し人心の活動は未來に過去に無量劫を窮むべし色身は生物界の原則に遵ひて生住異滅の相を逃がれざらん而して心靈は縦横自在宛轉無礙時々刻々に擴大し進歩し昇騰して無限に到らずんば止まず思ふに這般神妙の能力は有限なるもの、有し得る所にあらざるべし

(四) 第四に吾人は理想を覺知するの力を有せり吾人の爲す所固より圓滿ならず而して吾人は常に圓滿ならんとするを禁する能はず一步を進むることなし一事を成し得れば更に之よりも圓滿なるもの高等なるものを求めて之を成さんと欲す動植物の如きは常に分に安んじ足るを知るならん彼等は過去の歴史を知らず將來の運命を會せざれば也但人間に至りては決して脚を一處に止めて現實のみを是れ事とする能はず誓つて究竟理想を實行せんと欲す蓋し吾人が胸中に刻まれた

る至美至善至眞の理想は到底除くべからざれば也

人心は一切の上に圓滿ならんとす管に智力のみならず徳に於ても亦圓滿ならんとす其智を求むるや一を得れば二を得んと思ひ二を得れば三を得んと思ふが如く其徳に於ても一段又一段を経て必ず圓滿の人たらんとす

思ふに人生の行路は崎嶇として頗る平ならず善者も天運の逕道に會ふを免かれず悪者も時の利勢に乗することあり孔子の聖を以て陳蔡の間に苦しみ盜跖の凶を以て浮雲の富貴を逞しうす正成の忠も南朝を救ふ能はず馬子の奸も一世の榮華を盡す只當時に在りて之を見れば善惡正邪を辨する甚だ易からず而かも時移り世換るに隨ひて佛魔妍媸自ら其影を隠す能はず若し人心を以て僅かに電光石火の如きに過ぎずとせば何の時に加道義の光を認め得べき若し人心の奥底に不生不滅の確信を有することなしとせばかの正を蹈んで恐れざるもの

何が故に自ら信じて疑はざること此の如く深且大なるを得る乎又後代の人之を傳ふるに當りて何が故に不可思議の冥助を得たる如く忽ち自ら其大なるを感知せんとする乎圓滿の理想は有限の生に實行せらるゝを得ず陥缺は吾人生の常にあらずや而して尙不生不滅の確信は人心をして圓滿に至らんと欲せしめずんば止まざる也故に一善と雖圓滿に近きものあれば之を爲せるものも亦不生不滅の生命を感得し之を見聞するものも亦不生不滅の生命を感得せずんばあらず獨逸の大哲學者カント曰く「最高の善は實地上靈性の不生不滅を先づ假定したるにあらざれば存在する能はず」と(カントは假定と曰へども吾人は之に反して不生不滅の事實なるを信ず詳論は後而を看よ)然り吾人にして不生不滅の生命を有するなしとせば圓滿の智と云ひ圓滿の徳と云ふ痴人夢を説くの類ならんのみ畢竟理想の存在は不生不滅の理を先決して而して始めて會得せらるべきなり

(五)吾人は更に一步を進めて慈悲の至情は宇宙を包ひも尙足らざる所

以を説くべし蠻族は禽獸を去る尙未だ遠からず是を以て其情は専ら自己の存在種族の繼續を維持せんとするに在りと雖進化の度を高むるに隨ひて其愛は次第に膨脹して一家を愛し一族を愛し一郷を愛し一國を愛し更に進んで天下を愛し又更に進んで有縁無縁三界萬靈を愛するに至る愛の大なる必ずや無限に進み無窮を窮めて而る後始めて休す是に於て乎人心は一身の存亡安危を以て事とする能はず大義のためには命を捧ぐる鷲毛よりも輕しとなす蓋し無邊の慈眼を以て此宇宙を見れば五十年の色身は只是れ海上の一小漚本來不生不滅の生命は生滅の何たるを覺知せざる也

今夫れ吾人の生命を以て此殼漏子を滅却すると同時に滅却すべしとせば他を愛して何かせん身を殺して仁を成して何かせん其の最も保存するに必要なものを捨て、其最も保存するに必要なならざるものを取らんとす是豈に顛倒の甚しきものにあらずや物質論者は或は曰

はん是れ社會の生存に必要ながため也而して社會の生存は其身の幸福なるがためなりと然れども今其身を捨て、社會を利せんとするが如き社會を利し了りて而して誰か其幸福を享けんとするものぞ若し人生を以て五十年に限れりとせば人類は如何なる事情に逼迫せらるゝも決して其生命を放捨せんとは決心する能はざる也適例は禽獸に在り

以上列擧する所の數事實に由りて之を見れば不生不滅の道理は人心秘奥の處に潜在すと謂はざるべからず固より境を逐ひ塵に交はれるものは嘗つて此道理を自覺する能はざらん然れども彼等も亦是眞理海中に波を揚ぐるもの我執の念に束縛せらるゝ時と雖眞理の光は赫々として尙仰きつべし不生不滅の靈氣は一切處に遍滿すれば也

請ふ是より近代の科學に由りて不生不滅の理を明にせん一種の宗教

家は不生不滅を以て科學の證據し得る所にあらず又拒否し得る所にあらずとなすと雖彼等の科學を見るや頗る狭し科學は畢竟物質論を主張するものとなせり是故に彼等は天啓説を假り來りて超絶的不生不滅を説かんと欲す然れども吾人は不生不滅を以て科學的に證明し得べしと信するもの也否主觀的信憑だけにては未だ充分に不生不滅を證據し得たりと謂ふべからざる也

前章に論じたる如く吾人の所謂る心意なるものは一種の超絶的實體にあらずして感覺性質及概念などの集合し統一せる全系を曰へるものなることは讀者の既に知悉せる所ならん而して是等の諸分子は何れより來りて何なる事を作し何の處に去るべき乎と云ふに其所謂賦性なるものは進化の原則に因り代々を経て祖先より遺傳し來れる也其所謂る概念なるものは教育習練より得たる結果なり其所謂慣習なるものは模擬に由りて獲たる也其所謂確信なるものは個人的經驗の

蘊籍に由りて收めたる也其所謂理論なるものは反省靜慮の泉より迸
 出し來れる也而して是等諸般の心意原素の間に生ずる相互の活動即
 ち思想なるものは心意の庫裡に貯蓄せられたる萬種の思念を結合し
 て更に新思想を案出す是れ則ち吾人が將來を計り未然を察する所以
 なり
 故に吾人の心意或は靈魂の歴史は無限の過去より傳はれるものと謂
 ふべし心の生涯は吾人が此個人的色身を得たるとき僅に始まり而し
 て之を失ふとき忽ち終るにあらず吾人が今有する思想の嘗て感得せ
 られたる時既に吾人は存在したりしなり又此後其感得せらるべき時
 に會はば吾人は復た其時に存在すべきなり果して然らんに吾人は
 無始以來生存せる也又無窮の未來に至るも尚生存すべき也何ぞや人
 の人たる所以は轉變無常の色身に存するにあらずして實に其心性的
 なる處に存すればなり

化醇の理は密々繩々として霎時も絶ゆることなし吾人が五十年の生
 涯は一彈指の間のみ而かも一たび進化海中に足を投ずれば吾人は忽
 然として不生不滅の人となる無始の過去より繼續し來りたる吾人の
 心性は更に高等の進化を遂げんため歩一步盡未來の際に進まんと思
 る也色身は一定の時限を経て滅亡せん心性は則ち無始の過去より傳
 はれる心性に和して一團となり以て復た子孫の方寸裡に現出すべし
 進化は不生不滅の生命を待ちて始めて全きを得る也
 之を書籍に喩ゆん乎書籍を組成せるは其紙片其文字其結束に在りさ
 れど是れ書籍の精神にあらず書籍の精神は其文字に因りて表詮せら
 れたる意義の裡に在りて存せり一部の書冊は時代經るに従ひて朽敗
 腐蝕して遂に泥土に歸するならんされど其所載の精神にして貴重の
 ものならしめば代々を経て益改訂せられ益善美にせられ數千百版を
 更へて無窮に傳はるや必せり

故に此方面より觀察すれば吾人の心靈的生命は吾人の特有にあらず私有財産にあらず之を祖先より傳へて之を子孫に授け畢竟宇宙全體の共有物なりと謂ふべし

傳へ言ふ楠正成の湊川に戦死せんとするや七たび生を更へて北朝を亡ぼさんと叫びぬと然り豈啻七生のみならんや彼は今日と雖尚吾國民の精神中に在りて活生涯を營みつゝある也看よ山村僻陬の兒女に至るも正成の名を知らざるはなく又其名を聞きて其徳を慕はざるはなきにあらずや故にコンエルトの聖人エマーマン曰く彼は(プレトリー)妻をもたず子をもたず而して文明諸國の知者は擧げて彼の子孫となれり彼精神の熏習する所となれりと

色身の相續は或は斷滅すべし精神は生を代ふると雖決して湮滅することなし死は吾精神の斷滅にあらず變化は則ち之れあらん變化なければ進歩なし化醇なし生々の理は固より一處に拘束せられず而かも

不生不滅の理は歴々として變々化々の間に行はれて自ら寸毫の變易なき也

苟も進化論の所説を信ずるものは亦當に不生不滅の理を信せざるべからず是必然の勢也超絶的靈魂の想をなすものは只重きを主觀の上におきて科學が發見したる眞理を蔑視し又物質的觀察に慣れたるものは精神の何たるをわすれて一向に現實をのみ眞なりとなす其に理の全豹を得事の眞相を穿てるものにあらずと謂ふべし

超絶的靈魂の想をなすものは魂魄なる一種の實體あるを信じ此肉體の破壊に歸するや忽ち飄々として宇宙に去るとなす若し果して然らんには先づ無形の魂魄あるを證據せざるべからずされど吾人の經驗は心意中別に這般の一怪物ありて出沒自在の活動をなすを教へず然り既に教へずとせば是決して實在せざる也實在せずとせばまた之を滅却するの患なし本來所有せざる底の怪物を失はじと煩問するは寧

る痴ならざらんや且つ魂魄の不生不滅は生命の相續にあらす更に別物の生出したる也何となれば吾人は一生の間未だ嘗て魂魄など云へる閑家具を要せざれば也よしや此宇宙の外に夢幻的宇宙ありて魂魄此に住すべしと想像も得るとなすも吾人の道德は之と何の關涉する所かあらん

又一類の唯物論者は吾人の生命を以て肉體の死と共に終はるものとなし重きを色身に措きて其精神を問はず是を以て我執の念頗る強く一言一行悉く這裡より迸出すされどかの電光石火の如く忽ち見はれは却て是れ自ら亡滅を招く所以にあらすや自ら廣大無邊なるものを取りて好んで之を矮小にし青天白日の下に澗歩せる身を取りて自ら囹圄の中に繋ぐ是故に彼等は快樂を求めて痛苦を得希望を求めて失望を得無花果を求めて蒺藜を得麩包を求めて蛇蝎を得而かも自ら之

を悟らず益力を盡くして之を得んとす力竭き氣枯るゝに及んで始めて四十九年の非を知ると雖も既に遲きこと八刻なりと謂はざるべからず思ふに彼等にして全然舊時の人生觀を捨て、新たなる基脚點に立つにあらざれば終に宇宙の光明を認むる能はざるべし

又或般は思へらく此の如くならば他人をして吾蔭きたる種子を收めしめんとするものにあらずや吾は此種の不生不滅を以て満足する能はずと是亦實我の城廓に割據せるもの彼等は後代の子孫を以て他人の看をなせども其實は吾人の反影に外ならず吾人亦此くの如くにして過去より祖先の精神を傳へて今日に至れる也即ち吾人は祖先の再來に過ぎずと謂ふべしされど若し彼等の思惟する如く吾人の生命を以て一代を越ゆるなく祖先が營々汲々として蓄積したる結果も水泡の空しきに化し去りたりとせば吾人即今の境涯は直に原嶽時代の生涯に墮落するなしとせんや

嘗て基督教傳道師の綠島グリーンランドに布教せるものありエスキモー族のために死後における天上の生涯を説きて無量無邊の福德到る處に横溢せるよしを教へたり彼等乃ち問ひけるは「天堂にも亦鯨族海豚の類多き乎」救はれたるものは多量の肝油を受用し得る乎」と宣教師は直に之を否定して吾人天堂の生涯には這般の食料を要せずと教へたり然るにエスキモー人は忽然坐を起ちて曰ひけるは「若し鯨なく海豚なく肝油なしとせば吾は天堂に行くを欲せず地上にて得べき最上の愉快すら之れなしとせば天上の生涯は吾が利害を感すべき所にあらず」と遂に去つて歸らざりしと云ふ彼の色身の滅後尙吾意識の相續を希ひ此種の不生不滅にあらざれば満足し難しと云ふが如きは尙エスキモー的妄想を脱し得ざるものと謂ふべし

上來述べ來り述べ去りたる所にして果して過なからんには吾人が不生不滅の生命を有するは疑ふべからざるの事實となさるべからず

吾人は忽然として此に孤存するにあらず無窮より始まりて無窮に傳はるべき一大鐵索の一分を有して存在する也而して一分の死は直に一分の生を喚び來る一往一來一進一退其窮まる所を知らずたとひ大地は碎けて微塵となり星辰は散じて雲霧とならんも生々の理は更に其形相を改めて新惑星の上に活現し吾人が至善至美至眞の一大理想に向つて蕪進するや必矣蕪爾たる六尺の身其存否は素より不生不滅と相關渉するなき也

佛教の説く所の輪廻説は此科學的の原則と相反映して一段の光彩を添ふるものあらん乎されど今は之を論ずるの遑なし吾人は但佛陀が婆羅門徒のために説きたる無我説心性相續論(不生不滅論と同じ)を引きて本章の結論となすべし彌林陀王問答經に曰く

拘多彈多は固より道に志すこと厚きものなりしかば己が靈魂の未

來を慮りて無數の犠牲を供へたりき然るに今や血を流して救を求むるの痴なるを悟りしも尙如來の教に満足せざりしかば彼又語を續きて曰ひけるは主よ汝は幽魂の再生するを信じ斯生の進化するに伴ひて輪廻するを信じ又吾生は業の理によりて其蔭ける所を刈らざるべからざるを信すと曰ふ然して尙靈魂の存在せざるよしを説くは是れ矛盾の論にあらずや汝の弟子は我の全滅を貴びて涅槃の最上福德となせりもし我を以て只行蘊サムスカイラの集りて成れるものとなさば吾存在は死と共に亡ぶるならん若し我を以て只感覺思想情緒の結び合へるものとなさば色身分離の節は我何くに行くべきか汝の弟子等が唱ふる無窮の福德なるものは何くに在るか是殆んど空言虚妄なるに似たり吾靜かに汝の教ふる所を思ふに只空々寂々なるが如きは如何

婆伽婆曰ひけるは

「婆羅門よ汝は道に志すものなり自ら欺かざるものなり汝は實に靈魂の事を慮れりされど汝は一要件を知らざるが故に汝のなす所は徒事なり

「靈魂を以て特立自存の實體なりと夢想するは只愚痴迷妄を離れざるがためのみ

「婆羅門よ汝の心は尙我の繫縛を離れず汝は天國を慕へり天國に到りて我の樂を得んと思へり是をもて汝は眞理の福德と眞理の不滅とを見ること能はず

「吾誠に汝に告げん婆伽婆の來れるは死を教へんとにあらず生を教へんとて也而して汝は未だ生死の何たるを看破らざる也

「この色身は亡び去るべし犠牲を供する如何に多きも汝は之を避くる能はず故にたい心の命を求めよ我の在る處には眞理を容るゝ能はず眞理の在る處には我を存するを得ず故に汝の心を眞理の中に

かけ之を放ちて六合に洽からしめよ永遠の命は眞理の中に在り
「我は死なり眞理は命なり我に執着するは恆に死せるなり眞理の中
に動くは涅槃を分てるなり涅槃は永遠の命也」

拘多彈多曰ひけるは「尊敬すべき主よ涅槃は何處に在るか」

佛陀答へけるは「涅槃は戒を守れる處には在らずと曰ふことなし」

婆羅門「吾之を解せり涅槃は場處にあらず何の處にも在らざるが故
に實在にあらずと汝は曰へるならんか」

婆伽婆汝の解する所正しからず吾言を聞け風は何れの處に住める

か

「風には住所なし」

婆伽婆詰りて曰ひけるは「さらば汝は風をなきものと思へるならん」

拘多彈多は何の答をもなさざりき婆伽婆又問ひけるは「婆羅門よ吾
ために智慧の住處を告げよ智慧は場處なるか」

拘多彈多答へけるは「智慧には住處なし」

婆伽婆曰ひけるは「さらば汝は智慧なし悟道なし義なし救なしと云
ふか涅槃は何れの處にも之れなきが故に夏日の熱きに苦しめると
き大雄風の來りて世界を吹き廻るが如く如來は涼しき甘き静けき
喜ばしき愛の息を以て人間の心を吹き掃はんとして來れり熱にて惱
めるものは清風の來れるを喜ばん而して其苦は和くに至らん」

拘多彈多曰ひけるは「主よ汝は大なる教を宣へ給ふに似たりされど
吾は之を會得する能はず願はくは吾をして更に問はしめ給へ若我
なかりせば如何にして不生不滅あるを得るか吾曹もし思惟するこ
となくば心の活動は止まり思想の發生は休まん」

佛陀答へけるは「吾曹の思想することとは熄むべしされど吾曹の思想
は熄むべきなからん推理することとは絶ゆべしされど智識は留らん
拘多彈多曰ひけるは「如何にして是れあるか推理と智識とは同一物

なるにわらずや」

婆伽婆乃ち喩を設けて其區別を説きけるは、今此に一人あり夜に入りて書を認めんと思ひ、僕に點燈を命じやがて書き了りたるとき燈火滅したりと想へ、火は此の如く滅したれども、書けるものは依然として此に在り是もて推理は止むとも、智識の留まるに比べつべし然り此理に由りて心意の活動は休まんされど其經驗智恵及一切の行為の結果は總て永く存せずと曰ふことなけん」

拘多彈多主上願はくは吾ために告げ上行蘊サムスカーラにして個々に分離し去らば自己同一なるもの果して何くに在るか吾思想にして擴まり吾靈性にして輪廻すともとは吾思想にわらず吾靈性にわらざるべし願くは譬を取りて之を明し給へ主よ自己同一の理は何れに在るかを

婆伽婆曰ふ、今人あり點燈せりとせよ此燈は終夜消ゆることなかる

べきか」

拘多彈多然り消ゆることなかるべし」

「其夜の第一刻に燃ゆる燈火と第二刻の燈火は果して同一なるか」
拘多彈多はためらひぬ、さなり同一の燈なり」と思ひたれども又其裡に深意のあらんを恐れ且は精確ならんと試みて乃ち曰ふ「否同一にわらず」

婆伽婆さらば兩箇の燈火ありとせんか一は第一刻に燃ゆるもの一は第二刻に燃ゆるもの」

「否同一燈なりとも曰ひ得べく同一燈にわらずとも曰ひ得べし此燈火は同種の材料を燃やし同種の光明を發し同一の目的に用ひらるべし也」

「善し汝は昨日燃ゆる燈火の尚同一の行燈に在りて同種の油を焚き同一の室内を照らして今此に燃ゆるべし、わらざるべしを呼びて同

「なりとなすか」

拘多彈多注意して曰ひけるは「これ或は日中に一たび消えたらんも知るべからず」

婆伽婆「よし第一刻の燈は第二刻に至りて消えたりとせよ若し更に第三刻に燃え出でなば汝は之を同一なりと云ふか」

拘多彈多答へけるは「同一ならずとも曰ひ得べく同一なりとも曰ひ得べし」

如來再び問ひけるは「燈火の消えたる間に過ぎし時刻は燈火の同一なるとならざるに何の關係を有てるか」

婆羅門曰ひけるは「否何の關係か之れあらん數年間を隔つるも一秒時を隔つるもはた又燈火は暫くにして消えたりとなすも然らずとなすも同一と非同一とは依然として之れあり」

「善哉然らば一方より之を見れば昨日の燈火と今日の燈火とは同一

なりと曰ひ得べきも他方より之を見れば時ごとに異なりと云ひ得べきは吾曹の共に肯ふ所なり加之同種の燈火にして同一の室内を同等の光明にて照らすとせば同一の燈火なりと云ひ得べからん」

「然りと拘多彈多は答へぬ」

婆伽婆曰ひけるは「さらば今汝の如く感じ汝の如く考へ汝の如く行ふものあらば是人は汝と同一の人なりと云ひ得べからざるか」

拘多彈多は之を遮りて「否」と答へぬ

佛陀「汝は世界の事物に應用して誤なき論理法は又汝の身に應用しても誤なきものなることを否まんとするか」

拘多彈多は暫し打案じ居けるが徐ろに答へて曰ふ「否吾は否まじ同一の論理は普く信ならずと曰ふことなしされど我には一種の特性の具はれるが故に自餘の事物自餘の我とは全く別種に屬せりたとひ正に吾の如く感じ吾の如く思ひ吾の如く行ふ人ありともよし吾

と同一の名を稱へ同種の所有を持てる人さへありとするも是人は
我にあらざるべし」

佛陀實に拘多彈多よ是人は汝にあらざるべしさらば又吾がために
言へ人あり學校に入りて遂に卒業したりとせよ在學の時の彼と卒
業の時の彼とは同一の人なるかはた然らざるか罪を犯せる人と之
がために手脚をきらるべき人とは同一なるか將た然らざるか」

「彼此皆同一の人なり」

「さらば同一と曰ふは只繼續の義に由るのみなるか」

「管繼續にのみよるにあらす亦重に品性の同一不變なるに之れ由る」

佛陀乃ち斷じて曰ひけるは善しくさらば汝は同種の二の燈火を
同一なりとなすが如き論法に由りて人も亦同一なりと曰ひ得べき
を肯ふなり是意を推さば同一の品性を具へ同一の業より成れるも
のは汝と同一なりと謂はざるべからず」

婆羅門の拘多彈多は然り吾もまた爾か思へり」と曰ひぬ

佛陀更に一步を進めて曰ふ昨日の汝と今日の汝と同一なりと云ふ
は實に是理に由るのみ汝の品性は汝の身體をなせる物質より組織
せらるるに非ずして身體感覺觀念の諸様式より成れる也汝の靈魂は
行蘊サムスカイラの結び合へるなり行蘊サムスカイラの在る處は即ち汝の在る處なり行蘊サムスカイラの
往く處に從ひて汝の靈魂も亦行かざるべからず是の如くにして汝
は一方において汝の我の同一なるを認むるなるべく又他方に於
ては之を認めざるならんされど若しこの同一を肯はざるものあら
ば是人は一切の同一を否むものと謂はざるべからず彼は問をなせ
る人と一分時後に答を聞く人とは同一人にあらずと謂ふならんさ
れど是の理の非なるは上來の所述にて分明なるべしさて今は汝の
業カミのうち保存せらるる汝の品性の繼續を思へ汝は品性の斯く相
續不斷なるを以て死とするか將滅となすかはた生となすか生の相

續せるものとなすか」

拘多彈多曰ふ吾は之を呼びて生となさん生の相續して絶えざるものとなさん何となれば是は吾生の連續して盡きざるものなればなりされど吾は這般の相續を念とせざるなり吾が慮る所は別種の同一相續に在り即ち吾と同一なるとならざるを問はず吾此身以外ものを以て全然吾も異種の人となすが如きものを謂ふなり吾は實に此種の同一相續を慮れり」

佛陀好し是れ汝の願へる所なるか汝は實我に執着せり汝を迷謬に導くは之がためなり汝をして徒に煩悶せしめ惡事を爲さしめ又諸々の憂慮に迷はしむるものは之がためなり我に執着せる人は生死に輪廻して窮まる所なし是の如き人は常に死せるものと謂ふべし何となれば我の性たる永遠の死なれば也」

拘多彈多曰ひけるは如何にして然るか」

佛陀乃ち汝の我は何に在るかと問ひたれど拘多彈多は何の答をもなさざりき佛陀曰ふ汝の執着せる我は轉々變々して窮まりなきにあらずや始は僅に呱呱の聲を揚げたる嬰兒に過ぎざりし汝は漸く長けて兒童となり青年となり而して今や成人となれり嬰兒と成人と其間果して何等の同一ありや只僅に一種の意義をもて同一なりと言ふに過ぎざるのみ寧ろ第一刻の燈と第三刻の燈とは一層同一なりと謂ふべきか燈はたとひ第二刻にて一たび消え去りたりとするもさて汝が營々として保存せんと思へる眞の我は昨日の我なりとせんかはた今日の我なりとせんか寧ろ明日の我なりとせんか」

拘多彈多はいたく窮しけるが遂に曰へるやう世界の主よ吾誤れりされど吾尙迷ふて決する所なし」

如來曰ふ行蘊サムスカイラの存在するに至れるは化醇サムスカイラの次第に由れるなり漸次の變化を経ずして忽然存在するに至れる行蘊は一箇半箇も之れあ

る、こ、と、な、し、汝、の、行、蘊、は、前、世、に、て、汝、が、な、せ、る、所、行、の、結、果、也、汝、の、靈、魂、
は、其、行、蘊、の、結、び、合、ひ、て、成、れ、る、も、の、な、れ、ば、行、蘊、の、跡、を、留、む、る、所、に、靈、
魂、は、輪、廻、せ、さ、る、を、得、ず、汝、は、這、裡、に、相、續、し、て、生、又、生、を、受、く、る、な、ら、ん、
汝、は、今、生、及、前、生、に、て、蒔、き、た、る、種、子、の、收、穫、を、來、生、に、て、刈、り、取、る、な、ら、
ん、

拘多彈多誠に主よそは公平なる報酬とは云ひ難からん吾が今生に
て蒔きたるもの吾後に外人ありて之を來生に刈り取らんとするは
公平なりと謂ふべからず

佛陀良久して答へたるは斯くまで教ふるも汝尙悟る能はざるか汝
が外人なりと思へる其人は固より汝自らなることを會得せざるか
汝が蒔きたるものは汝自ら刈り收めざるべからず豈に餘人の與り
知る所ならんや
貧窮缺乏の中にありて哀れなる境涯に沈めらるゝものを思へ幼に

いて懈怠放逸なりしが故に長ずるに及びても尙生を計るべき策を
知らず然るに汝は幼童と成人とは同一の人にあらざるが故に其零
落に沈めるは自ら招ける所にあらざるとなさんとするか

誠に吾汝に告げんたとひ九天に昇るとも海底に潛むとも山嶽萬重
の中に匿るゝとも汝がなせる惡業の果報を逃れ得べき箇處は何く
にもあらざる也

而して汝が善行の果報福德を得るの確かなることは亦復此の如し